

エキセントリシティ

eccentricity 【èksəntrísəti, -sen-】

1 [U] (言動・性格・服装などの) 異常、風変わり (なこと) ≪in, of≫。異常さ、変わり具合

1 a [C] (しばしば-ties) 常軌を逸した行為、奇行、奇癖

2 [C] ≪機械≫ 偏心 (距離)。≪数学≫ 離心率

(プログレッシブ英和中辞典 第五版)

1

「てかさー、堅書君……だっけ？ あいつ何なの？ 超付き合い悪くない？」

「私も思った！ せっかく同じグループになって、こっちが挨拶してんのにさ。飲み会に

も来ないし。最悪」

女子二人がハイボール片手に欠席裁判で盛り上がってるのを、冷めたポテトフライをつまみながらあたしはぼんやりと眺めている。ハデ目のメイクの子と小動物系の子。心の中で勝手にハデ子と小動物ちゃんって呼んでる。思ったよりこいつら口が悪いなー。まあ変に善人ぶるよりはいいけどさ。

「ま、まあ、バイトとかかもしれないねえしき。明日、今日の課題、一緒にやろうって誘ってみようぜ」

「だよな、今日もちよつと急だったし……。僕、一回生のときからあいつと実験一緒だったけど、悪いやつじゃないよ。コミュ障だけ」

変なTシャツの男子と眼鏡の男子はヒートアップする女子組をなだめようと必死だ。このまま女子が結束しちゃって、女子と男子が断絶しちゃうのを恐れてるんだろうな。でも変T君も眼鏡君も、完全にハデ子と小動物ちゃんに気圧けおされてる。

このまま変な対立構造できちゃったら面倒だなー、と思いながらチーズを口に放り込む。頼んだレモンサワーは全然来ない。

河原町かわらまちの大衆居酒屋。三回生前期の演習は六人のグループ単位で課題をやることになっていて、今日はグループ結成記念の飲み会だった。

厳正なる抽選の結果、うちのグループはちょうど男女三人ずつという工学部にしては奇跡的な構成になって、合コンかよとかイカサマじゃねって怨恨のこもった視線が男子率100%のグループから飛んできてただけで、今夜のこの飲み会は男子一人が欠席したことで、結果として構成のレア度はSSRまで跳ね上がった。

その欠席者が、今このテーブルでもっぱら話題の堅書君だ。学科の中でも印象薄くて、そういやいたなあって感じのやつ。たぶんこれまであたしはしゃべったことなかったと思う。グループ分けが終わって、親睦会を兼ねて飲みにも行こうかってみんなで盛り上がった中で、堅書君は荷物をまとめてそそくさと帰ろうとしてた。眼鏡君が「飲み会、行かないの?」って声をかけたら、「あつ、その、そういうの僕ちよつと……すいません……」とかなんとかモゴモゴ言いながらスーツと消えてった。そりゃ、心証悪くするわ。あたしだってさすがにちよつとイラツとした。

でも、まあ、このまま悪口大会になるのもなんかイヤだった。せつかくのお酒が不味くなる。

「へえ、堅書君と実験一緒だったんだ! じゃあ慣れてるよね。よし、今後の対応任せたから! ……あ、レモンサワーこっちでーす!」

やっと運ばれてきたサワーとレモン絞り器を受け取りながら、あたしは話を少しはポジ

タイプな方向に持って行こうと努力する。

「うん。ちょっと人見知りっぽいところあるけど、話すと普通にいいやつだし、レポートとかも見せてくれてめっちゃ助かったわ。……あ、でも」

眼鏡君はちょっと言いよんどんで、ビールを一口あおった。

「昔はもっと人付き合い良かったかも。学科の飲み会とかにも出てたし、なんだろうな、もうちょっと人生楽しそうだったっていうか」

不穏な話しぶりに、全力でレモンを搾っていたあたしの手が思わず止まる。

「え、なにそれどゆこと？」

「んー、なんかあいつ、最近ちょっと変わったんだよね。前はもっと普通だった」

さっきまでボロクソ言ってた女子組もヤバって顔をしてる。

「やっぱ今は普通じゃないってこと？　てか、昔は飲み会出てたんだ？　それってなんか余計ムカつかない？」

ああもう、またそっち方向に話戻さないでよ、とハデ子に内心うんざりしていると、
「俺の見立てによるとだな……それはずばり、彼女に振られたんだな！」

と斜め横から断言調で迷推理が飛んできた。変T。なんでうれしそうなのこいつ。

「えー、彼女以前の段階なんじゃない？　告って玉碎した的な？」

「絶対それだよ！ 彼女いない歴イコール年齢ってやつ！」とケラケラ笑う女子たち。だけど、それを眼鏡君は即座に否定した。

「や、堅書は彼女いたよ」

瞬間、みんなの笑い声が止まった。眼鏡君は淡々と真顔で、でも自信ありげに続けた。「ていうか、いる。たぶん今でも普通につきあっていると思う」

2

「え？ 堅書君て彼女いるんだ!? まさかの展開！ 面白すぎ！」

「マジかよ……堅書でさえ彼女がいるのに、俺ときたら……」

再び大爆笑する女子二人とうなだれる男子一人を無視して、

「えマジで？ それってどんな人？」

とあたしはやや食い気味に尋ねる。あんな協調性ゼロ、コミュ障の塊みたいな人間に彼女さんがいるなんてびっくりで、単純に好奇心がうずいた。

「僕も会ったことはないけど……。だいぶ前だけど写真見せてもらったら普通に美人だっ

た。なんかハーフツインテール？　ていうのかな？　髪が」

眼鏡君は両耳の上あたりで髪を軽く束ねるような仕草をしてみせる。

「え、ヤツバ！　何それ二次元？　あ、Vカノ？」

「いや、普通にリアル。京斗大生^{けいと}って言ってた。学部は違うっぽい」

「マジかー。てか、うちの大学でハーフツインて何者!？」

「あ、あと高一からずっとつきあってるって言ってるってびびった」

「高一！　足かけ六年じゃん！　すご！　すごすぎなんだけど！」

昼に会った堅書君とのギャップがすごすぎて、イメージが音を立てて崩れていく。

「テンションたっか」

「ハーフツインのリアル彼女だとお……くそっ、あいつ、前世でどんな善行を積んだってんだよ……!」

「あんたVカノと添い遂げるんじゃないかったっけ」

あの堅書君も普通に彼女さんの話なんてするんだ。なんか意外。ていうかその頃は別に普通の人だったのかも。だとしたら、何かあったのかな？　それこそ、その彼女さんに振られちゃったとか。

「ていうかさ、ほんとに今でもつきあってるのかな？　急に振られて落ち込みまくってん

のかもよ？」と直球で尋ねてみる。

「少なくとも先月の時点では、週一で会ってるとは言ってた」

「そっか。てか結構堅書君としゃべってんだね」

「うん。あいつ話振ると結構しゃべるよ。……それに、堅書が何かおかしくなったのって、二回生の後期くらいからなんだ。でも彼女とは今でも普通に続いてるっぽい。だから、なんともなくだけど、彼女は関係ないんだと思う」

会話をどうつなげたらいいかわからず、五人とも黙ってしまった。

「まあ、倦怠期とかかもしれないよね。そんだけ長くつきあっているとさ——」

絞りきったレモン汁をサワーのグラスに注いで、あたしは分かったような口をきく。それにしても、二回生の後期って何かあったつけ、と考えてみたけど心当たりは全然ない。

小動物ちゃんがカルーアミルクをマドラーでくるくるかき混ぜながら、

「おかしくなったって、具体的にどう変わったんだろ？ メンタルとかだとちょっと心配だよね……」

と深刻そうな声で言う。さっきまで本人が聞いたらメンタルやられそうな発言連発してたのあんたでしょ、とあたしは心の中でそつと突っ込みを入れる。

「あ、いや、あいつ、別に病んでるとかは無いと思うよ。おかしくなったのはちよつ

と言い過ぎだったかも。悪かった」

眼鏡君があわてて言い直す。

「そうだな、ええと、おかしくなったんじゃないかって……うーん、なんだろうな、余裕がなくなっただっていうのかな。必死感っていうか。受験生の十二月みたいな感じ？」

「ああ……」

大学受験は一応あたしたちの共通体験だったから、眼鏡君のその一言でみんな妙に納得した。そっか、ああいう感じか。つらいやつだ。でもなんでだろう？　まさかここまで来て仮面浪人なわけないし。

「なんだろ、就活？」

「えー、うちらも今年の夏はインターンやるけどさ。就活ならむしろもっとコミュニケーション上げろよって思わない？」

「だよねー。私達だってバイトで忙しい中で、ちゃんと演習やっていきたいからこういう会を設けてんのにさ」

「院試だって、まだ一年以上あるしな。いや、むしろ今年が遊ぶ最後のチャンスなんだよな……。人生最後の夏休みか……。くっ……」

またもや謎にくずおれている変Tの横でぼそっと眼鏡君が放った一言が、今日の飲み会

で一番のハイライトだったかもしれない。

「なんか堅書ってさ、もう研究室に入ってたよね」

「ええー!?」

「マジ？」

「はあ？　なんで!?」

「ちょ、研究室配属って四回生からじゃないの？」

うちの学部は四回生になると研究室に配属されて、一年かけて卒業論文を書くことになってる。だいたいこの研究室は今あたしたちがいる吉田キャンパスから遠く離れた桂キャンパスにあって、四回生と院生、教職員しかいない灰色の陸の孤島は、毎日がお祭りみたいな吉田とはあまりに別世界っていう印象があった。

「じゃあ堅書君って、桂に通ってるってこと？」

「そうらしい。あいつ講義終わるといつも桂バスで速攻あっちに帰るんだよ」

だから、演習のあとすぐに消えてたのか。

「てことは、家も桂？」

「うん、元々実家住みだったらいいんだけど、なんか最近一人暮らし始めたって」

「氣イ早すぎ！　私なんかむしろ一秒でも長く吉田にとどまりたいんだけど」

それはあたしも同感だった。来年四月から“島流し”にあうことを考えると、正直ちよつと憂鬱だった。

「だいたい、三回生で研究室って、制度的にアリなの？」

「どうなんだろう。正式な配属じゃなくて、ただ出入りさせてもらってるってだけなんじゃない？」

「かもしれない。千古研らしいんだけど、あの先生よく『気軽に遊びにおいで』って言うてるし」

「あー、それめっちゃ言うてそう」

千古先生は、奇人変人が多いうちの学科の先生の中でもとびきり変わってて、講義も正直カオスすぎて何言ってるのかわかんなかったけど、とにかく楽しそうにやりたい放題やってる印象があった。もっとも、本人は普段はあまり桂にも吉田にも吉田にもいないらしくて、御所の近くにメインオフィスがあるんだって言うていた。

「いや、でもさ、遊びに行ってるってレベルじゃない？ 引っ越しまでしてんしょ？」

「やっぱ堅書、あいつおかしいわ。普通じゃねーわ。大丈夫なのかよ……」

「私は千古研って聞いてなんか納得。あの研究室にはマッドな人間が吸い寄せられる何か

があるんだろうねー」

結局、堅書君はやっぱ変だという結論で全会一致して、グループの結束がちょっぴり高まった気がした。険悪な雰囲気もいつの間にか消えていた。

教室の堅書君の、どこか思い詰めたような横顔をうつすら思い出す。

「マジで、堅書君って何考えてんだろうね？ ま、うちら凡人にはわかんないんだろうけどさー」

変人の考えていることはわからない。それが今日の飲み会の結論だ。あたしは大皿に最後まで残っていた「遠慮のかたまり」に遠慮なく箸をのばした。

3

話をしてみると、確かに堅書君は思ったほど取っつきにくいヤツじゃなかった。口数は少ないし、ちょっとキョドってるけど、最低限の世間話くらいには乗ってくれる。ただ、いつまでも「ですます」口調を崩さないのがハデ子がキレて「ですます禁止！ 使ったら罰金五百円ね！」と宣言してからは、グループ内ではタメ口で話してくれるようになって、

ちよつとは馴染んできたかなと思う。あたしは別にどっちでもいいんだけど。

堅書君の彼女さんの話は、あの飲み会の翌日の演習でしっかりイジられた。

「堅書い、お前さ、何抜け駆けして彼女作ってんだよ！俺にも写真見せてくれよお！」

変Tは今日もまた別の変なTシャツを着ている。抜け駆けも何も、変Tと出会う三年も前から堅書君は彼女さんとききあっているんだから、言いがかりつてレベルを超えている。いきなり特大の理不尽をぶつけられて怪訝な顔をしている堅書君に、眼鏡君がバツの悪そうな顔で、

「ごめん、昨日の飲み会で堅書の彼女の話になってさ」

とフォローする。ハデ子と小動物ちゃんも「堅書君の彼女？ 見たい見たーい！」と寄ってくる。

「え、あ、その……」

詰め寄られて堅書君も観念したのか、渋々スマホに一枚の写真を表示させた。場所は鴨川の河川敷なのかな。意外にも露出度の高い服を着た長髪の女性が立っている。かなり大胆なシヨルダーカットにぴっちりしたシヨートパンツ。しかも服の中央にスリットがあつて、おへそが丸見えになつてゐる。ちよつとすごいな。こういうのが堅書君の趣味なんだろうか。

……が。

肝心の顔が、よく見えない。かなり引きで撮られてて、ポートレートというより風景写真の中にたまたま人が映り込んでる、って感じ。しかも彼女さんもちょっと顔をそむけ気味だ。髪もハーフツインなのかただのロングなのかよくわからない。スタイルもいいし、美人っぽいことは何となくわかるけど、たぶん街で会っても気づかないなこれ。

「これじゃ、顔わかんなくない？ もっとアップの写真ないわけ？」

「堅書君さあ、わざと解像度低い写真出してきたでしょ！ にしても服すっご」

「おおお、俺には見えるぞ！ ハーフツインの美少女が恥じらっている姿が！ 泣きぼくろが神々しい！」

変T、どういう目をしてんの。そもそもこの粗い画像のどこにそんな情報量が含まれてるっての。

これ以上の写真が出てこないようなので、あたしは質問タイムを開始する。

「これが堅書君の彼女さんかー。マジエグいねー。何学部？」

一瞬、間があった。

「あ……。そ、総そ合人う間学じ部……」

「総人！ 総人ねー。あー、うん、なるほどー……」

工学部のあたしにとっては文系とも理系ともつかない謎の学部なので、話をどう続けたらいいかわからない。

「じゃあさ、高校の時って、どういうきっかけで知り合ったの？」

「えっと……。図書委員で、一緒だったんだ」

「へえ、堅書君って図書委員だったんだ！　いかにもやってそう。休み時間とかいつも難しそうな本読んでるもんね」

「……」

堅書君は心なしが顔が赤くなってるようにも見える。でも、照れてるのか、怒ってるのか、戸惑ってるのか、よくわからない。

「ねえねえ、総人って吉田南でしょ？　大学内でしょっちゅう会えるじゃん。いいなー。今日も会ったりした？」

割り込んできた小動物ちゃんも遠恋中なので、心底うらやましそうだ。

「いや……。しばらく会ってない」

「しばらくって……。どのくらい？」

「ええと……。四週間。いや五週間、かな……」

場の空気が変わった。

「はあ？」

「なんで!？」

「すぐそこでしょ！ 隣じゃん！ なんで会わないの！」

「それ、やばくね？ 俺でもわかるわ」

「堅書さ、週一で会ってるって言ってなかったっけ」

「ああ……あの頃はまだ会えてたんだけど、最近忙しくて」

「……W i z は？ 最近送ってる？」

「送ってない……」

「ヤバいって。それマジで自然消滅コースだって」

「いやー、彼女のほうも反応ないなら、もう手遅れなんじゃない？」

全然だめじゃん、って思った。六年間も続いてきたことが奇跡かもしれない。というかもしれない。もうとづくに終わりを迎えてるのかも知れなかった。

一気にお通夜ムードになったところで、先生が入ってきてしまった。演習が終わると堅書君はいつものように秒で教室を出ていった。今から彼女さんに会いに行くとも思えない。いつものバスで桂キャンパスに帰ったんだろうな。

それ以来、堅書君の彼女さんの話はなんとなくタブーになってしまった。だって、怖く

て訊けないじゃん。あれからどうなったの、なんてさ。

堅書君はその後もいつもと変わらずに、淡々と講義や演習をこなしては、毎日バスで桂に帰って行った。飲み会には何度誘っても来てくれなかったし、お昼ご飯もいつも何かの専門書を読みながら一人で食べていた。話を振ると一応答えてくれるけど、基本的に空き時間はいつも何かしら勉強したりコーディングしたり英語の論文を読んだりしてて、なんとなく話し掛けづらかった。しかも演習中の余った時間にも、何やら内職していた。先生やTAにもバレてみたいんだけど、課題はちゃんとこなしてるので黙認されてるっぽかった。

一度、みんなで集まって一緒に課題やろうぜって話になったことがある。確か前期の終わり頃、いつもの作業通話も何となく飽きてきたあたりだったと思う。小動物ちゃんが「どうせなら桂キャンパスに行ってみない？ そのほうが堅書君も誘いやすいし」とか言い出して、桂まで行くことになった。まあ、それはただの口実で、なんとなく夏の遠足気分でみんなとわいわいプチ遠出したかっただけだ。一応事前に、眼鏡君がWizのグループで堅書君に連絡したんだけど、全然既読がつかない。いつもそうだから、多分ほんとに読んでないんだと思う。だから、実質的にアポ無し突撃するしかなかった。

変丁が誰かから聞き出してきた堅書君の下宿は桂キャンパスの真裏にあった。いかにも昭和って感じの、今にも倒れそうな安アパート。半信半疑で部屋のドアをノックするとほんとに堅書君が出てきた。だけど堅書君はあたしたちの誘いを速攻断って、部屋に引っ込んでしまった。しょうがなく、堅書君はやっぱり変人だとか口々に言いながら、五人で桂キャンパスの図書館に行ってそこで課題をやったり、隣の建物の食堂で夕飯を食べてみたりしたけど、みんなだんだん口数が少なくなっていく。四回生になったら毎日こんな生活になるのかってどんよりしていたのはきつと、あたしだけじゃなかったんだと思う。しかも吉田までの連絡バスが結構早い時間になくすることを誰も知らなくて、結局普通のバスやら阪急やらを乗り継いで帰らないといけなくなつて、散々な目にあつた。

あの日、堅書君のアパートの廊下で見た海の家みたいなちっちゃい共同シャワー、玄関先で感じた扇風機の熱風、山の中に現れた灰色のキャンパス、辺り一帯を覆う草いきれの匂い、食堂で黙々と食べたチキンカツ、帰りのバス停から見上げた生ぬるい月。それらは一夜の夢みたい、あたしの記憶の中に強烈に残り続けた。まさか翌年、あの安アパートにしょっちゅう通うことになるなんて、当時は予想もしてなかった。

何しろあの頃はまだ、堅書君のところに、ヤタはいなかったしね。

4

「堅書君っ。やつほ」

ギシギシと音を立てながら安アパートの廊下を歩いていくと、珍しく共同キッチンの前で堅書君と鉢合わせした。

「……何の用」

暑さのせいもあるのか、堅書君は少し不機嫌そうだ。ていうか、この前よりもさらにやつれてるみたいに見える。

「何の用って、ヤタのワクチン！ もう四週間経ったでしょ？ 堅書君忙しくて忘れてんじゃないかなって」

「……ああ、もう四週間か」

「ほらやつぱ忘れてる！ 堅書君、W i z も読んでくれないしさー。来ちゃった方が早い

し」

ヤタっていうのは、三月に堅書君が飼い始めた子猫だ。真っ黒で、ちっちゃくて、子猫にしてはすごくおとなしくて、それでもつてめっちゃ可愛くて、会うたんびにぐんぐん大きくなってるから会いに来るのが楽しいんだ。堅書君てば、猫の飼い方も知らないのにヤタを拾ってきて死なせかけて、たまたま忘れ物を届けに来たあたしが見つけて速攻お医者さんに連れてって、その後もつきつきりであたしと一緒に世話をしたから助かったんであって、あたしはヤタの命の恩人なのに、まるで感謝してもらえてない。その後の育て方も危なっかしいから、こうして時々様子を見に来てる。

ヤタっていう名前は堅書君がつけた。弱っていたヤタに子猫用ミルクを数時間おきに飲ませ続けて数日すると、荒れていた毛並みもすっかり良くなって、カラスの濡れ羽色っていうのかな、真っ黒で艶やかになって、「つやつつやになったね！ カラスみたい」ってあたしが言ったら堅書君が「名前決めた。ヤタにしよう」って。ヤタガラスのヤタなんだった。なんか、導きの神様なんだったって言ってた。

ヤタの面倒をしょっちゅう見に来てあげられるのも、四回生になってあたしも桂に引越したから。去年だったら無理ゲーだったな。あたしは堅書君とは別の、データサイエンス系の研究室に入って、今は卒業研究と院試の勉強を進めてる。講義や演習はほとんど

なくなつて、基本的に研究室が居場所になるから、学科のみんなでするむ機会もすっかりなくなつちやつた。桂での学生生活は思ったほど悪くはなかつたし、研究はそこそ楽しいけど、吉田でのバカ騒ぎが時々無性に懐かしくなったりもする。

堅書君はちょうど鍋でお湯を沸かしているところだった。手にはパスタの袋を持っている。

「お、なに？ パスタ？ パスタじゃん！ ほおー、堅書君パスタ作るんだ！ いいじゃん。何味？ カルボナーラ？ ジェノベーゼ？ マンマミーア？ ランボルギーニ？」

「塩味」

「ちよつとさあ、ツツコミくらい入れてよ！ ……って、え？ 待つて？ いやいや塩つて！ 塩つて何！ ていうか何でボケにボケで返すかなー」

「いや、だから味付けが塩で」

「はあ!? 塩オンリー？ 素パスタ？ 素うどん的な？ 副菜もなし？」

見るとコンロの脇には確かにお皿と塩とお箸しかない。その瞬間、今日もあたしは爆発してしまう。

「何考えてんの！ どんだけ極貧生活してんの！ 死んじやうよ！ 待つてて今パスタ

ソース買ってくるから！ 逃げないでよ！」

扇風機の回る音が部屋に響いている。堅書君は部屋の床に座って、あたしは玄関のたたきにしゃがんで、二人でパスタを食べる。トマトソースとソーセージで超適当ナポリタン。チーズ入り。他にも野菜ジュースとか、レトルトカレーとか、サバ缶とか、常温保存できて栄養がありそうな物もいろいろ買ってきた。パスタのアレンジにも使えるしね。あと、ヤタのフード。

「マジでずっと塩パスタだったの？」

「ああ。塩だけって、けっこう旨いんだ」

「そういう問題じゃないでしょ！ ……壊血病になるよ。ほら、昔、船乗りとかがなつてたやつ。堅書君が倒れたらさ、ヤタはどうなんの」

「……」

「猫を飼うってのはさ、そういうことにも責任を持つことだかんね」

「……そうだな。ありがとう」

今しゃがんで、玄関先の一メートル四方の空間にはヤタもいて、無心に子猫用フードを食べている。ここまではあたしも立ち入るけど、それはあくまでヤタのお世話のためだ。

部屋の中には踏み込まない。さすがに彼女持ちの男性の部屋にずかずかと上がるのはちょっと違うかなって思ってる。

というか、彼女さんと今どうなっているのかは、あれから訊けてない。ずっと気にはなってる。でも、彼女が確実にいないってのはつきりするまでは中には入らないって、自分の中で決めてるんだ。口には出さないし、堅書君も何も言わない。自然発生的に生まれた、あたしたちの奇妙な緩衝地帯。

「んー、美味しかったつしよ！ やっぱ夏はトマトだねー」

食べ終わって横を見ると、堅書君も空になったお皿を床に置いて、壁にもたれて一息ついていた。ま、さすがに洗い物くらいは自分でやってもらわないとね、と思いながらお皿に目をやる。……あれ。何かが、変だ。

違和感の正体は、きれいに除けられた輪切りのピーマンだった。

「あー！ ちょっと！ 何ピーマンだけ残してんの！ お子様じゃん！」

「うっ……その……」

「食べなさいよっ！ 全部食べないと、買ってきた物全部持って帰っちゃうよ」

ピーマンを口に入れてすぐに水で流し込む堅書君に呆れつつも、意外な一面を見た気がして何だか笑ってしまう。

「ふふっ……あははははっ」

「お子様で悪かったな」

「ほんっとお子様だよ。ヤタもあきれてるってさ。ねえヤタ、お前のご主人様はなんでもんなお子ちゃまなんだろうねえ」

ヤタの耳の付け根をこちよこちよする。ヤタは小さく鳴いてあたしの足元にごろんと寝そべる。

「でもさ、ピーマンが苦手でも、パプリカならいけるんじゃないかな？ あれなら苦くないしさ。彩りもきれいだし」

すると堅書君が軽く鼻で笑った。

「何笑ってんの！ 笑うとこじゃないでしょ！」

「あ、いや、ごめん、つい最近まったく同じことを言われたから……」

「え？ 誰に？」

思わず反射的に訊いてしまった。

「う……、かつ、彼女に……」

あ……。

彼女さんと、ちゃんと続いてたんだ。

そっか、そうだよな。六年もつきあってるんだもんね。そう簡単には別れないよね。まったくもう、心配させないでよ。安心したけど……なんだろう、そうならそうと早く言つてよ。

「ちょっと、彼女さんにまで言われてんの!? 彼女さん、健気すぎて泣けてくるわー! っていうか彼女さんはさ、元気? ちゃんと連絡取つてんの?」

「ああ、先月久しぶりに少し会えたんだ。連絡はなかなかできてないけど」

「先月!? ダメじゃん! やっぱダメじゃん! むしろあたしのほうが会つてんじゃない。勝ったね」

「かもしれない」

「何認めてんの! 知らないよー? このまま勝ち進んじゃうよ?」

「いや……、僕だって好きこのんで彼女を放置してるわけじゃない」

……ああ、うん、まあ、そりゃそうだよな。なんだかんだいっても、彼女さんだもんね。でも、だとしたら。だとしたらさ。

「じゃあ、なんで?」

ずっと訊きたかった、だけど心の奥底に押し込めていた問いが、ふつふつと湧き上がってくる。堅書君に突きつけるなら、今しかない、と思う。この勢いで訊いちゃえ。ずっと我慢していたけど、訊けばきつと、楽になれる気がする。

「忙しい忙しいって、何がそんなに忙しいの？ 彼女さんもヤタもほったらかしにして、学科の行事や飲み会も全部すっぽかして、食事だってこんなに切り詰めて、去年から研究室に入っちゃって、休み時間もずっとペンキョしててさ」

学科のみんなやあたしも、どれだけ堅書君のこと心配してたと思ってんの。

「院試だって願書出さなかったんでしょ。あたし、てっきり千古研にそのまま進むんだと思ってた。だから猛勉強してるのかなって思ってた」

あ、ダメだ、なんか止まらなくなってる。自分の声が震えている。

「ねえ、堅書君はさ」

気がついたら立ち上がっていた。ヤタの真ん丸な目がこちらを見上げている。

「そこまで自分を追い詰めて、大学生活全部放り投げて、何しようとしてるの」

堅書君は一瞬ひるんだように見えたけれど、ゆっくりと口を開いた。

その返事は、全然、答えになっていなかった。

「……どうしても、会ってお礼を言いたい人がいるんだ」
話がまるで見えない。

「え……。どういうこと。それって誰」

バカみたいな返事しかできない。頭の回転が速すぎる人って論理が数段飛ぶっていうけど、これがそれなのかな。

「僕はその人のことを、いつも『先生』と呼んでいた」

遠いどこかを見つめながら、ぽつりと堅書君がつぶやいた。その表情は、なんだか不思議と、高校生くらいの男の子に見えた。

5

「先生？ ……高校の先生とか？」

意味がわからない。でもなんか、この話はちゃんと聞かなきゃダメな気がした。

「いや、違う。別に教師だったわけじゃない。だけど、なんていうかな……。『先生』としか呼びようがないんだ。思い出すたびに『先生』と言いたくなる」

私は再び玄関先にしゃがみこんで、ヤタのおなかを撫でながら堅書君の話に耳を傾ける。毛並みと体温を感じるうちに、さっきまでの荒ぶった気持ちが少しずつ落ち着いてくる。

「ふうん……？　よくわかんないけど、大切な人だったんだろうなってことはわかるよ」

「うん。僕と彼女を出会わせてくれて、僕にいろいろなことを教えてくれた。だけど先生は、僕の前から消えてしまったんだ。いや、僕が消してしまった。この手で。ずっとそう思い込んでいた。あの時はそうするしかなかったと頭では理解できても、僕にとってはそれがずっと心の重しになっていた。僕だけが幸せになっていいんだろうか、そう思ってた」

話がどんどん意味不明になっていくけど、その口調は真剣そのものだ。

「だけど、二回生の時にわかったんだ。先生は消えたわけじゃなかった。どこかにいるんだって。その情況証拠を僕は掴んだと思っている。だから僕はもう一度先生に会いたい。もう一度だけでいい。会ってお礼を言いたい。もしかすると僕が生きているうちには無理かもしれないけど、それでも先生のいる世界に手を伸ばしたいんだ。その可能性に賭けよう」と決めた」

いつもの寡黙な堅書君とは別人みたいに饒舌で、その静かな熱量にあたしは少し驚く。

「そっか。なんとなくわかった。堅書君はどうしてもその先生に会いたいんだね。で、そ

れと堅書君の猛勉強とどんな関係があんの？」

「うーん。どう説明すればいいかな。……僕は、京都歴史記録事業センターの職員になりたいと思っている」

「京都、歴史……？」

「千古さんの講義を受けてるなら、アルタラセンターがある所と言ったほうが通じるかな」

「あ、講義で聞いた！ 量子記憶装置とか、クロニクル京都とかでしょ」

「そう、それ。歴史記録事業センターの中でも特に量子^{アル}記憶装置^{タラ}の管制を専門に司る部門」

アルタラセンター。確か、京^ウ斗^チ大とブルーラ社と京都市だか京都府だかでやっている、産学官の共同事業の母体。量子^{アル}記憶装置^{タラ}っていうでっかい半球の写真は見たことがある。千古先生はそのセンター長を兼務していて、吉田や桂にほとんどいないのも、センターにほぼ住[、]んでいるからって言ってた。

「アルタラセンターってさ、そんなに勉強しないと入れないの？ 普通の就活じゃダメなんだ？」

「研究機関だし、国際事業の一翼でもあるからね。普通は学部卒では入れない。職種にも

よるけど、複数の高度技術試験に合格しなければならない」

「ほえー。そんなに大変なんだ。千古研のコネがあっても無理なの？」

「千古研に在籍していたというだけで入れるなら僕だってこんなに苦労はしていない。センターにいる千古研出身者は数人だけだ。しかも千古研で博士号を取ってもエンジニア採用ではたいして重要視されない」

ふう、と一度ため息を吐いてから、堅書君は熱っぽく語り続ける。

「千古研に入ったところで、院生は直接アルタラを触らせてはもらえない。アルタラのビッグデータを間接的に扱った研究がせいぜいだ。アカデミックな研究としては興味深いけど、僕が目指すのはそこじゃない。だいたい千古さん自身、桂にいないしね」

「じゃあ、なんで三回生から千古研に入ってたわけ？ 千古研に行っても無駄っていう話に聞こえたけど」

「正確には二回生の終わりから出入りしてた」

「はっや！」

「学部のように基礎知識として、千古研で博士号を取得するのと同等の知見とスキルは一応持っておきたかったんだ。桂なんかで五年間もモタモタしてられないし。それに、まあ吉田にいるよりは現場の情報も入りやすかったからね」

なあんだ。堅書君が早い段階から桂キャンパスに行つてたのは、桂に骨を埋めるためじゃなくて、逆に桂での院生生活五年間を早回しすることで、桂から早く去るためだったんだ。あれほどストイックな堅書君でさえ桂キャンパスを出たがつてたなんて、何か笑っちゃった。

「ふふ、だから院試受けないんだね。アルタラセンター一本勝負なんだ」

「ああ。僕はこれに賭けてる」

大博打だなあとも思うけど、潔く夢を追いかける姿はちよつとوراやましいなと思った。あたしは、なんとなくまだ就職したくなくて大学院を考えてるだけだし、修士課程を出た先で自分が何をやりたいのかも見えてない。

「なんとなくわかった。アルタラセンターにその先生がいて、一緒に働きたいってこと？ お礼を言うだけなら、普通に千古先生にでも頼んでみたら会わせてくれたりしないかな」

「うーん……。今はいない、というべきかな。まあ、アルタラセンター自体は足がかりにすぎない。あと、千古さんに頼んで会えるわけでもないから、千古さんには先生の話は一切していない」

「なんで!? 千古研の先輩とか、センターの人にも？ ええと、あと何てったつけ、助教

の女の人」

「徐^{シユ}さんかな。話してない。千古研やセンターの人達も知らないと思う」

先生はこの分野の人なんだろうなと思って聞いてただけに、その答えはまるで意味がわからなかった。一瞬、ぞくりとした。この人は、堅書君は、あの千古先生の研究のさらに先に行こうとしてるのかもしれない。何か、とんでもないことをやってやろうとしてるのかもしれない。

なんていうか、もうそれは、あたしなんか聞いたってきつと理解できるわけないんだろうな、って気がした。

堅書君はアルタラセンターに入って、それからなんか頑張つて、先生に会う。あたしがわかったのはそれだけだけど、少し満足した。

あ、でも。

この話を知る権利がある人が、まだ他にもいる。堅書君の密かな野望のせいであつちや苦勞させられているらしい人が。

「じゃあさ、彼女さんは……？」

背中を汗がつたうのを感じた。

「彼女さんは、知ってるの？ 堅書君が何のためにこんなに苦勞してるのか」

「ええと……。アルタラセンターに入りたいということ、それまでの数年間、勉強に専念させてほしいということは伝えている。彼女もそれを認めてくれて、僕の好きなようにやらせてくれている。だけど、その目的が先生との再会这件事情は、たぶん知らないと思う」

「そうなんだ……」

じゃあ、ひよつとして、ひよつとすると。

これって、堅書君の他はあたししか知らないってことなのかな。

「この話、彼女さんも知らないのに、聞いちゃって良かったんかな」

「僕自身の問題だから他言はしないつもりだけど、君にはヤタのことでこれだけ世話になっているし、専門的な話も通じるから、訊かれたら話してもいいかなと思って」

「……ん、そっか」

千古先生も彼女さんも知らない、ささやかな秘密だ。

「ふふ、じゃ、あたしもみんなには黙ってるね」

その時、ヤタが小さく鳴いた。

「そっか、ヤタもだね。この話は、堅書君とあたしとヤタだけの秘密。ヤタ、人に言っちゃだめだかんねー」

ヤタはすりすりとしたしのひぎに甘えてくる。甘えるのは子猫の特権だ。

片手でヤタをあやしながらあたしは、このまま堅書君が彼女さんを放置して死に物狂いで勉強を続けてくれても別にいいんだよって思っちゃってるのに気づく。ただこんな風に、時々ヤタのお世話をしながら、堅書君と他愛のない話をする。そんな日がずっと続いてくれればいいなって。

だけどそれって、堅書君にとっては幸せなんだろうか、とも思う。

やりたいことがあるのはわかった。それはすごいことだ。でもそのために彼女と会うのも我慢して、毎日不健康な食生活して、一分一秒も惜しんで貴重な大学生活を勉強に捧げるのって、堅書君の人生にとって、いいことなんだろうか。

あたしの中で、二つの矛盾した感情がぐるぐるせめぎあっている。

「でもさ」

少し考えて、やっと口にした。

「夢があるのはわかったけどさ、堅書君は無理しすぎなんだよ」

本と机とPCしかない殺風景な部屋を見回しながら続ける。

「こんな生活してたらマジ死んじゃうって。勉強しながらでも、もうちよつとこう、大学生らしい楽しみとか、生活の彩りとかさ」

「そんな器用なことできないよ。要領が良くないから、一分一秒でも愚直に頑張るしかないんだ」

「堅書君てさ。……わりとドMだよ」

堅書君は少し考え込んだ後、急に何かに気づいたみたいな顔をして、こんなことを言った。

「思ったんだけど、僕の先生も人生の目標のために、ずっと大変な苦勞をしてきたんだ。すべてを切り捨てて、極貧で死に物狂いの生活をした。……もしかすると、先生を追いかけるあまり、知らないうちに僕の生き方もそれに縛られてしまってるのかなって」

さすがに、バカになって思った。ベンキョしすぎて、バカになっちゃったのかなって。だから思わず言っちゃった。

「は？ バカじゃないの!? いくら恩師だって、所詮、他人じゃん」

露骨にムツとする堅書君。他人じゃないんだよって顔をしてる。結構、考えてることがそのまんま顔に出るんだよね。うん、まあ、ちよつと言い過ぎたかな。ごめん。

「いや、まあ、なんつーかさ、先生は先生の人生、堅書君は堅書君の人生があつてさ、それってまるつきり別物なわけじゃん」

「……………」

堅書君は何か反論したそうにも見えただけ、黙りこくって何やら考えている。

「それに先生だってそんなこと堅書君に望んでないと思うよ。どんだけ苦労したかしんないけどさ、教え子にもそれを体験させようなんて、負の連鎖だよ」

「……」

「だから、堅書君が先生に憧れる気持ちはわかるけどさ、それに人生を束縛されちゃダメだよ。そこまで生き急がなくなつて、先生だってきつと待っていてくれるよ」

「……そうか」

「もつとさ、大学生らしいこともやりなよ。今日みたくダラダラおしゃべりする日があつたつていいじゃん。ヤタのことも堅書君のことも、いつでも力になるからさ」

「そうだな。ありがとう」

「彼女さんともたまには遊びに行ったりしてあげなよ」

調子に乗って、さっきまでは思ってもみなかったことを言ってみたりする。でも今はなんだか素直にそう思えた。

立ち上がって、ヤタを抱えて段ボールにひょいと入れる。ヤタは大人しくタオルの上に丸くなった。

「そんじゃ、ヤタ、そろそろ獣医さんのところに行こつか。お前のご主人様は今日も留守

番して猛勉強だからね」

ヤタを連れていく準備をしていると、堅書君がすっかりカピカピになったお皿を重ねながら、

「今日は本当にありがとう。助かった」なんて殊勝なことを言った。

「ほんつと感謝してよね。これは貸し！ 堅書君がアルタセンターに入ったら一万倍にして返してもらうってことで！」

ヤタが導きの神様つてのは本当なんだなあってぼんやりと思った。こんなに長く堅書君と話したのは初めてのことで、あたしは堅書君のことをすっかりわかった気になっていた。だけど、実際は何もわかってなかったんだ。堅書君は一番大事なことをずっと隠していた。それを知ったのは、卒業を間近に控えたある冬晴れの日のことだった。

6

「じゃあね、ヤタ。明日までいい子でお留守番するんだよ」

今日も安アパートのドアをパタンと閉めて、冷え切った廊下に出る。

堅書君は、勉強の理由を打ち明けてくれて以来、たまに研究室に泊まり込むときヤタの世話をあたしに頼むようになった。近くに住んで猫の世話も慣れてて堅書君の事情も知って、頼みを断れないってわかっているから。だから洗いざらい話してくれたんだな。ほんっとあいつ策士すぎ。完全にあたし、都合のいい女じゃん。でもまあ、アルタラセンターの最終入所試験の結果も来月にはわかるらしいし、あたしも卒論をやっと出し終えて一息ついたし、何より二月のこんな寒い日にヤタを放っておけなかった。ごはんと水を用意して、ブランケットとタオルでくるんだ湯たんぽも置いてきたから、きっと大丈夫。

鍵なんて誰もかけてない不用心なアパートの廊下は静まりかえっていて、つま先だって歩いていてもタイツ越しに底冷えが伝わってくる。早くここから出ようと思った瞬間、急に正面からまぶしい光が差し込んで、思わず目を細めた。廊下の突き当たりにある表玄関のドアが開いて、誰かが靴を脱いで上がってこようとしている。

逆光で顔がよく見えない。だけど、シルエットは明らかに堅書君じゃなかった。女性だ。

丈の長いコートに身を包んでいる。ストレートの黒髪の一部を、両サイドで結んでいる。ハーフツインテール。

初対面だけど、あたしには一発でわかってしまった。

——彼女さんだ。堅書君の。

ずんずんとこちらに近づいてきた彼女さんは、あたしの二メートル先で立ち止まった。沈黙が流れる。彼女さんは軽く会釈してから無表情で言い放った。

「もしかして、堅書さんにご用でしょうか」

逃げられない。観念するしかなかった。

桂キャンパスの一角にあるカフェテリア。この時間は人もまばらだ。Sele^セlene^{レネ}という、月の名を冠したその食堂で、こういう風の吹き回しか、あたしと彼女さんは向き合って座っている。

堅書君のアパートで彼女さんと鉢合わせするなんて、最悪のシチュエーションだった。堅書君の部屋のドアを閉めてるところは見られてないと信じたい。あたしは必死に弁明した。堅書君と同じ学科の同期で、卒論関係の配布物を届けに來ただけで、ノックしたけど不在だったんだ、って。前半は嘘は言っていないけど、配布物から先は完全な出任せだ。それなら、と彼女さんが部屋を開けようとしてくれるのを、これは本人に直接渡して説明しないといけないからとかなんとか言っ**て**必死に阻止した。ヤタが出てきてあたしにすりす

りして来たからおしまいだ。

その後は完全にテンパってて、何を話したのか正直覚えてない。ただ、彼女さんは堅書君の部屋には結局向かわずに「貴方のことは堅書さんから伺っています。どこかで少しお話できませんか」なんてめちゃくちゃ怖いことを言い出して、それ以来お互いに終始無言でこのカフェテリアまで来てしまった。何。伺っていますって何。怖すぎなんだけど！

緊張しすぎて味がしないチキンカツを口に運びながら、あたしはあらためて正面の彼女さんをそつと観察する。

誰がどう見ても完璧な正統派ヒロイン。写真で見た時はよくわかんなかったけど、近くで見るとなんかこう、オーラが違う。最低限のメイクなのに目鼻立ちは整っていて文句なしに美人の部類だ。服装は……今日はまともだけど、育ちの良さを感じる。それに比べたらあたしなんて完全に、どこにでもいるモブの造形。情けないくらいに。

だけどこの彼女さん、正直何を考えてんのか読めない。怒っているわけではなさそうだけど、にこりともしない。ずっと黙って無表情できんぴらごぼうを食べている。相当な変わり者なんじゃないか、って気がする。堅書君がまともに思えてくるくらい変だ。ある意味、お似合いのカップルなのかもしれない。

居たたまれなくなつて、あたしから尋ねた。

「あの……お話ってのは」

「ああ、そういえば、自己紹介がまだでした。すみません。一行、いちぎょう瑠璃るりと言います。一行、二行の一行」

言葉遣いは丁寧だけど、なんていうのかな、どこかぶつきらぼうというか、ぼそぼそとした素っ気ないしゃべり方。相変わらず仏頂面のままだ。

「いちぎょう……さん」

「総人の四回生です」

知っているとおりの情報だ。

「あ、はい。あたしはさっきも言ったけど工学部の四回生です。同期だし、タメ口で……いっかな」

「いいですよ」

OKしつつ、自分は合わせないんだ。やっぱちょっと変わってるわ。まあ、それならこっちもタメ口で行かせてもらおうよ。敬語だと向こうのペースに巻き込まれちゃいそうだから、あえて強気で行く。

「ありがと。よろしくね、一行さん」

「お気づきでしょうが、堅書さんと……交際を、している者、です」

一行さんは右斜め下に視線をそらしながら続けた。耳が少し赤くなったように見えた。それにしても「交際をしている者」って……。独特な表現をする人だな。

「はあ……それは、どうも」こちらも意味不明な返しをしてしまう。

「それで、話というのは、堅書さんのことです」

「ひっ」

キラリと光る刃のような言葉に背筋が思わず伸びる。何だろう。これ以上彼に近づかないでもらえますか、とかかな。あるいは、私達結婚するんです、とか。最悪の想像が無限に湧いてくる。

「堅書さんからは、貴方がいつも猫の面倒を見て下さっている、と聞いています。今日もそれで来てくださっていたのですね。ありがとうございます」

「ぎゃあ、全部バレてんだけど！ と、とにかく、いろいろと情報を下方修正しよう。堅書「君」なんて馴れ馴れしく呼んだらきつと殺される。」

「あ、ああ、猫ね。そんな、いつもとかじゃなくてごくたまーにだけど、ほら、あたしも桂だし、堅書……さん、時々研究室に泊まったりするからさ、そういうときだけごはんをね。あ、中までは入ってないよ！ マジで！ 玄関のところでごはんあげてるだけだから」

「では、堅書さんがアルタラセンターを目標していることは、ご存じですか」

なんつーか、この人も話が अच्छ 飛ぶね。

「うん。知ってる。……って、あ、もしかして合格内定したの!?」

「いえ、まだ最終試験の結果は出ていません。……ですの、今から話すことは、あくまで堅書さんが合格したと仮定しての話になりますか」

一行さんがこちらをぐいと見据えてくる。

「堅書さんがアルタラセンターで何をしようとしているのか、については情報をお持ちですか」

「え、えっと……」

たしか堅書君は、先生のことは彼女さんに話してないって言ってた。だから、黙って置いてあげたほうがいいんだろうな。あたしと堅書君の秘密だから。

「あー、実はよく知らないんだよね。何かやりたいことはあるみたいだけど」

「……そうですか」

沈黙。え、何この間。^ま怖い。何か怒らせるようなこと言っちゃったかな。怖すぎる。

そのまま一行さんは無言でお茶碗に残ったご飯の最後の一口に箸をつけ、お味噌汁を静かに飲み干した。どうにもペースがつかめなくて、生殺し状態のままそれを眺めていることしかできない。一行さんはお茶を啜って一息ついてから、ようやく再び口を開いた。

「それならなおさらのこと、情報を共有しておいたほうがよさそうです」

あたしは思わず唾を飲み込む。

「堅書さんは気を遣って黙ってくださっていたようなのですが、私は堅書さんが何をしようとしているのか、私なりに調査しました。恐らくですが、真相に近いところまでたどりつけたのではないかと」

怖っ！ 理解のある彼女さんかと思ってたけど、泳がせという陰で全部把握してるってか。これ、絶対隠し事できないやつじゃん。いやあ、堅書君も大変な人を彼女にしちゃったもんだね。

この様子じゃ、先生に会いたってこともきつとバレてそうだな、その話が出てくるのかな、とあたしは身構える。

だけど、続く一行さんの言葉は、あたしの予想を遥かに飛び越えてあさつての方向に飛んでいった。

「堅書さんは、おそらく、別の世界に行こうとしています」

「え？ 何？ 世界？ 留学？」

「別の宇宙、という表現のほうが正確でしょうか」

「……………はい!？」

何を言ってるんだろうこの人は。

「この宇宙の外に存在すると予想される別の宇宙、の意です」

一行さんの顔をまじまじと見る。冗談を言ってる顔には見えない。もしかしてスピリチュアルとかそっち系の人？

違うよ、堅書君はただ先生に会いたけなんだよ、と思わず言いたくなっただけ、そういえば堅書君、「先生のいる世界に行きたい」って言い方をしてたの思い出して、一気に戦慄する。

「荒唐無稽とお思いでしょうが、無理からぬことです。私自身、幾許かの疑念は残っていますから」

てつきり何かの比喩だろうと思ってたけど、百歩譲って先生が本当にどこか別の「世界」にいる、と堅書君が思い込んで、そこに行こうとしているんだとしたら。考えたくないけど、一行さんの言うとおり、別の宇宙とやらをほんとに目指してるんだとしたら。

——頭おかしい。やっぱり堅書君は完全に頭おかしい。もはやバカとか変人とかそういう次元じゃない。人としてヤバイ領域に突入してる。

そしてそんな話を真顔であたしに振ってくる一行さんも、負けないくらいヤバイ。

だけど、なんとなく頭ごなしに全否定しちゃいけない気はした。仮に堅書君が本当にお

かしくなつてるとしても、その背景には堅書君なりの筋の通った根拠があるんだろうと思いたかった。同じ学科で学ぶ同士として、科学的思考はまだ捨てないでいてほしい。

それに——もしも堅書君がただの妄想に取り憑かれていただけだったとしたら、彼の今までの頑張りとは完全に無駄になっちゃうことになる。それはあまりにむごい。たとえほんの一握りでもそこに真実があつて、堅書君は確かにこの世界の本質に近づきつつあつた、つて話であつてほしい。頭では否定しつつも、このめちゃくちゃなホTALL TALEラ話に一縷の望みを賭けたいと思つてしまつてる自分がいた。

「えっと、ちょっとまだ全然ついてないけどさ、一行さん、あたしに何かを教えてくださいようとしてるんだよね」

すっかり冷えきつたお茶を一口飲んでから、あたしはぴんと背筋をただして一行さんを見する。その目は嘘をついているようには見えなかった。

「とりあえず、ちゃんと順を追つて話をしてよ。全然わかんないかもだけど、ちゃんと聞くからさ」

「そうですね。お話しすると決めたからには、中途半端はいけません。やってやりましよう」

一行さんの瞳に強い決意の色が見えた。長い話になりそうな予感がした。先にヤタの所

に寄っておいでよかった、と思った。

7

一行さんは開口一番、

「まず、この宇宙がどうやって開闢したか、ご存じですか」

といきなりすごい魔球を投げてきた。あやうくデッドボールになるとこだった。とにかくボールを投げ返さなきゃ、話が續かない。

「えーっと……ビッグバンだっけ？ 宇宙論の講義でざっと習った」

「はい。初期宇宙の微小な量子ゆらぎが、指数関数的にインフレーションを経ること、現在の宇宙が形作られた、という説が有力です。ビッグバン仮説からは、因果律的に関わりを持たない——つまり、観測できない別の宇宙がこの宇宙の外に無数に存在するだろう、と予言されています」

言葉を選びながらゆっくりと一行さんは説明する。相変わらずボソボソと無愛想だけど、決して自信なさげというわけじゃない。むしろ、奥に秘めた強い信念を感じさせる、不思議

議な話し方。

「うん、多元宇宙マルチバースってやつだね。あ、さっき言ってた別の世界って、もしかしてこれ？」

「はい、私はそう解釈しています。ただ、多元宇宙は決して物理的に実証することはできません。私達の宇宙から、他の宇宙を絶対に観測できないからです」

「まあ、そうなるね」

「つまり極端に言うと、ただのお話に等しいわけです。物理学の範疇の外でしか語ることができない」

ん？ ただのお話？

「ここで、少し私の専門の話をさせてください。こういう物理学の外側を扱う学問が、今の私の研究テーマです。形而上学、メタフィジックスの一分野です。特に、ナラティブな視点から多元宇宙を記述しようと試みています」

「ナラティブ……？」

「さっき、ただのお話と言いましたが、お話、物語というのは、事象を主観的に記述したものです。事象を客観的に記述する物理学とは対極にあります。つまり、お話の世界にすぎない“宇宙の外側”には、客観的な時空間はもはや存在せず、主観的時間と主観的空間

のみが定義されます」

「……? ? ?」

「逆に言えば、主観的な時空間としてであれば、別の宇宙を記述できる可能性があるわけです。これが、私が今研究している物語論的宇宙論ナラティブの非常に大雑把な説明です。この宇宙の因果的閉包性は、あくまで物理領域に対してのみ規定される経験則でしかなく、ナラティブな領域ではその限りではありません。むしろ、時間も空間も本質はすべて主観的な物語なのであって、これまでの宇宙論では客観的な側面のみが注目されてきたに過ぎ

——

「ちょ、待って待って、ストップ! ……ごめん、ちょっと全然わかんない」

辛抱できなくなつて話をさえぎる。何やら変なスイッチが入っちゃったらしい。物理の話であればまだギリギリついていけたけど、物語がどうかというあたりで完全に脱落した。「すみません。確かに、本題ではありませんでした。ともかく、この宇宙の外ではあらゆる事象は主観でしか記述できない、ということだけ覚えていただければ」

「まだ全然わかんないけど……とりあえずわかった、ことにする。続けて」

「はい。別の宇宙に行くことを考えた場合、物理的には不可能でもナラティブなアクセスであれば可能ではないか、と私は考えています。物語であれば、因果の壁を超えることが

できる。ここでのいう物語とは、客観的・物理的身体ではなく主観的・情動的精神に基づいた手段、すなわち量子精神によるアプローチ、です」

「量子精神……あ」

その単語をあたしは千古先生の講義で聞いた覚えがあった。確か、器と中身、という言い方をしていた。量子記録データを利用して、脳に損傷を負ったネズミが目を覚まして動き出す動画を見せられたような気がする。

「えっと、言いたいのは……量子精神があれば、アルタラが使えれば、別の宇宙に行けるかも……ってこと？」

「一言で表すならそういうことです。量子記録技術は、むしろ貴方のほうが詳しいですね」

「まあ、基本的な原理を講義で習った程度だけど」

「十分だと思えます。厳密にはアルタラそのものを利用するというより、派生技術としての量子精神の固定・制御手法をナラティブ宇宙論の考え方に導入することを、堅書さんは考えているようです」

話が飛びすぎてにわかには信じられないけど、堅書君がアルタラセンサーにこだわる理由、特に直接アルタラを操作できるエンジニア職だけを狙ってる理由が少しわかった気が

した。いつだったか、堅書君が千古先生のさらにずっと先を見ているような気がして空恐ろしくなったけど、あの直感は正しかったのかも知れない。

「それでアルタラセンターを目指してたんだ。ま、ほんとに別の宇宙に行けるかどうかはおいといて」

「はい。まだ仮説の域を出ていません。予備実験で仮説を支持する結果が出ているという程度です。個人的には、眉唾とまでは思いませんが、現時点でのフィージビリティは五分ではないかと」

「そうなんだ」

「まあ、成功率自体は今後研究が進めば上がっていくでしょう。ですが、このやり方には致命的な問題がある。最近、私はそれに気づいてしまったのです」

一行さんは伏し目がちに続けた。

「致命的な問題？」

「はい。猫の面倒を見て下さっている貴方にはこのことをお伝えすべき。それが、今日お呼び立てした理由です」

あたしはぐくりと唾を飲み込む。「……続けて」

「ナラティブ時空間での量子精神の振る舞いは古典的な二体問題で近似できます。つまり、

軌道——という言い方が適切かわかりませんが、別の宇宙にアクセスする際の軌跡は二次曲線で表されます。ですが、どう計算してもその離心率 e が1を超えてしまう。双曲線になってしまうのです」

ああもう、また一人で暴走してる。だけど、致命的な問題って言われちゃったら、見過ごすわけにはいかない。

「はい、ストップ。えつとき、もう少しかみ砕いてもらえないかなって」

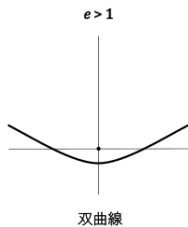
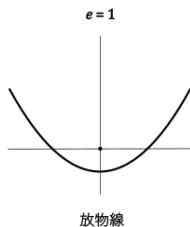
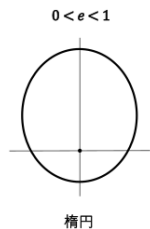
すると一行さんはボールペンを取り出して、手元にあった紙ナプキンに何やら描き始めた。

「うんと簡略化します。たとえば地球から月に向かう宇宙船は、ある軌道を描きます。それと同じように、この宇宙から別の宇宙に向かう際にも、軌道のような一種の道筋のようなものが定義できると想像してください。この道筋は二次曲線で近似できるのです」

「はあ……二次曲線ね」

「二次曲線は、離心率によってそのかたちが変わります。 e が1より小さいと楕円、 e 1で放物線、1を超えると双曲線」

一行さんは楕円、放物線、双曲線の図を横に並べて描いていく。数Cで散々やったっけ。楕円も放物線も双曲線も、実は共通の式で表せて、離心率っていうパラメータの値が違う



ただなんだったというやつ。見た目が全然違うのに実は同じものなんだったって知ったときはちょっと面白かったな。

「軌道が楕円であれば、一周してまた元のところに戻ってきます。これは、元の宇宙に帰還することに相当します」

手書きの楕円に沿って、ボールペンの先が大きく空中で円を描く。

「ですが、放物線、双曲線の場合、曲線は閉じていません。漸近線に沿って無限遠方に飛び去るしかない。太陽系に進入した恒星間天体の描く軌道と同じです」

描かれた双曲線の弓なりのカーブを指でたどってみる。その曲線は紙ナプキンの外側、無限の彼方からやってきて、また無限の彼方に続いていく。

「えっと、それって。もしかして」

そのドライな事実をあたしは認めなくなかった。それが意味するところを考えなくなかった。一行さんの言葉の続きを聞きたくなかった。

「はい。言い換えると、別の世界への旅路は片道切符になってしまう、ということです」

一行さんはおかまいなしに、あたしの脳天にとどめを刺した。

8

「ちょ、ちょっと待って？ 別の世界に行ったら戻って来れないってこと？」

混乱するあたしに、一行さんは淡々と話を続ける。

「その通りです。私のほうでも楕円解、つまり e が1未満となるような解がないか、探してはいるのですが」

うーん、ナラティブ物理学とやらの言葉で語られても全然イメージが湧かない。何とかこっちの土俵で解釈できないのかな。

「それってさ、物理的にはどういう状態なわけ？ ていうか全然想像がつかないんだけど、まさか行く時もほんとに宇宙船に乗ってくわけじゃないんだよね？」

「宇宙船はただの比喻です。まず量子精神を物理脳神経から切り離して、連結していない量子記録データの形にする必要があります」

「量子精神を、切り離す……」

ネズミの動画を思い出す。あの動画では確か、脳死状態のネズミの脳神経を量子精神で修復して、ネズミを生き返らせていた。

ええと、今回は、その逆、ってことだね。つまり、量子精神を物理脳神経から切り離したら、処置を受ける前のネズミみたいになるはずだ。

動画の冒頭シーンを思い出した。仰向けにぐったりと脱力していたネズミの姿。だらんとした手足、頭から伸びる電極。

吐き気がした。

「待って。切り離すってことは……」

「恐らくご想像のとおりです」

「脳死……だよ。体のほうは」

一行さんは頷いた。

「もちろん、量子精神が戻って来られるのであれば、再び物理脳神経に同調させれば元の状態に戻るはずですよ。モデル動物での実験はご存じですよ」

「うん。講義で見た。脳死したネズミが復活してた」

「ですが、今回のケースでは、そもそも量子精神がこちらに戻って来られないわけです。

つまり脳死状態のままとなってしまう」

「そっか。……最悪だね、それって」

別の宇宙がどうかはまだ信じ切れてないけど、ネズミの動画を実際に見てたから、脳死になるのはほぼ確実なんだろうなって思った。だいたい、一度脳死になってしまった人を再び蘇らせるのも常識的に考えてもかなり大変に思えたし、ネズミの実験だって成功率100パーセントってわけじゃないはず。そう考えると、やっぱり堅書君のやろうとしていることはどう見ても不幸に突き進んでいく自殺行為に思えた。

このままでは、堅書君の量子精神は失われてしまう。残された体は、あのネズミみたいな脳死状態になってしまう。

なんとしても止めなきゃいけない。絶対に。

もちろん、堅書君は夢が絶たれてしまって、きつとすごくがつかりすると思う。それはすごく心苦しいし、あたしだって本当は堅書君の夢が叶ってほしい。だけど、脳死になって周りの人達を悲しませてまで叶えるべきことじゃない。だからさ、何か別のかたちで堅書君の夢を叶えようよ。

「あのさ、一行さん」

「はい」

「ありがとね、教えてくれて」

わざわざ忠告してくれた一行さんに、素直に感謝したいと思った。

「ね、一行さんさ、一緒にこの計画を止めよう。堅書さんには悪いけど、一行さんからも説得すればきっとわかってもらえるって」

あたし一人では無理でも、二人がかりなら止められるかも知れない。

「堅書さんを脳死にんかさせない。そんな不幸な目には絶対に遭わせない。アルタラセクターに入るのは別にいいとしても、このまま実行したら何が起きるのか、全部ちゃんと説明しようよ」

それを聞いた一行さんは、少し困ったような表情で、

「私は、堅書さんを止めようとは思っていません」
と言った。

「……………今、なんて？」

「すでに説明はしました。ですが、それでも堅書さんは計画を諦める気配がありません。むしろより一層、研究に没頭するようになりました」

「……あいつバカじゃないの!？」

最近、研究室に泊まり込む頻度が上がったのは、最終試験に向けた追い込みなんだって

ばかり思ってた。

堅書君。マジで何考えてんの？ 戻って来れないって、脳死になっちゃうってわかって、何でそこまでして先生に会いに行こうとしてんの!?

持って行きようなない感情の矛先は自然と、目の前の彼女さんにも向かう。

「だいたい一行さんだって、なんで止めないの？ 止めたいからこの話をしてくれたんじゃないの？」

そりゃ、堅書君、意地っ張りだし、人の話聞かないし、説得は簡単じゃないってのはわかるよ。だけど、なんでそれをのうのうと黙って見てるだけなの？

「本人はやりたいのかもしれないけどさ、そんなの自殺行為だよ。そこで人生終わっちゃうんだよ。こんな不幸なことってないよ。周りの大事な人達、全員置いていこうとしてんじゃない。一行さんだって、もう二度と会えなくなっちゃうんだよ？ 一行さんはさ、それでいいわけ？」

「もちろん、そのような事態は可能な限り回避したいと思っています。離心率 e が1未満になるような解は全力で探し続けています。ですが、もしどうしても解が見つからず、そしてそれでも堅書さんが諦めないというのであれば、私も諦めません」

一行さんの瞳の奥に、不撓不屈の炎が妖しくゆらめいた気がした。

「その時は、私も堅書さんと一緒に行く、というまでです。——そうなった暁には、貴方に堅書さんの猫を託したいのです」

ここへ来てようやく、あたしは理解した。

堅書君も頭おかしいけど、一行さんはその何万倍も、狂ってるんだってことを。

「はあ!？」

目の前の彼女が何を言ってるのかわからない。全然わからない。人の姿はしているけれど、人の心を持ってない、理解の及ばないサイコパス。

「何考えてんの!? 一緒に行くって何? 一行さんも脳死になっちゃうじゃん。バカじゃないの? 諦める諦めないとかそういう話じゃなくない? そんであたしにヤタの面倒見ろって? どんだけ身勝手なこと言ってるかわかってんの!？」

怒りとショックと混乱がぐちゃぐちゃになって、自分でも何を言ってるのかもわからない。

「好きな人がバカやろうとしてたら、破壊の道に突き進もうとしてたら、それを全力で止めるのが彼女の役割なんじゃないの? ……あたしだったら絶対止める。堅書君が好きなら、堅書君に幸せになってほしいって思うもん。なんで黙って見てるの? むしろわざわざ

ざ不幸に引きずり込もうとしてんの？　それでも堅書君の恋人だって言えるの？」

「――堅書さんは、私が絶対に不幸にさせません」

一行さんの返答はあまりに明後日の方向を向いてて、怖いくらいに話を通じてなかった。一瞬でもわかり合えたと思った自分が情けなかった。絶望と幻滅しか感じなかった。

「何一人で堅書君を守った気になってんの？　そんなの全部自己満じゃん。別の宇宙なんてあるかどうかもわかんない、誰も実証できない。そんなもののために二人とも無意味に脳死状態になって、ただ二人の人生終わるだけじゃん。絶対完璧不幸まっしぐらだし」

「……」

「ご家族とか、大学のみんなとか、ヤタとかさ、残される人達の気持ちも考えてよ！」

もう限界だった。

「残されたあたしがどんな思いで、ヤタと生きていくと思ってるの……！」

一行さんは何も答えなかった。それを見て、もう何を言っても無駄だと思った。自分の中で何かが音を立って切れた気がした。一年間、そつと育んできた何かが。

立ち上がってコートを羽織り、バッグを肩にかけて、食べ終わったトレイを手持った。「……行きたいなら勝手に行けば。それで二人で仲良く勝手に不幸の谷に堕ちなよ」

呪いの言葉を吐いて、あたしは一人、その場を離れた。カフェテリアを出ると、冬の日

はもう傾きかけていた。コートの際元をぎゅっと締め、広い坂道を早足で下る。自然と涙が零れた。

もう会えないな。ヤタにも。堅書君にも。そう思った。

9

吉田キャンパス本部構内は、いつもと違う華やかな空気に満たされていた。正面のクスノキの周りは記念撮影をする人達でごった返している。そぞろ歩く色とりどりの袴姿、一発ネタのコスプレ集団、誇らしげに時計台の前に立つ親子連れ。外部会場での卒業式も学科ごとの学位授与式もひととおり終わって、みんな思い思いに時間を過ごしている。

喧噪から少し離れて、あたしは工学部のほうに向かってぶらぶらと歩いて行く。うちの学科はほとんどみんな大学院に進学して、四月以降も桂に居続けるから、卒業って言うたってそんなに感慨はない。だけど、四回生の間はまだ時々来ることがあったこの吉田にもいよいよ来る機会がなくなると思うと、あたりの建物をなんとなく目に焼き付けておきたくなった。

総合校舎の手前の大きな桜の木はもう五分咲きになって、青空とのコントラストがすごくきれいだ。スマホをかざして構図をあれこれ試していると、背後から声をかけられた。

振り向くと、堅書君と一行さんが、並んで立っていた。

堅書君は、まあ学位授与式の時にもいるのは気づいてたけど、普通にダークグレーのスーツに紺系のネクタイ。一行さんは、落ち着いたグリーンの袴に古典的な梅の小振袖。髪をアップにしている。学位記を抱えて桜の下に立つ二人はまるで一枚の絵みたいで完全無欠のカップルで、一瞬、思わずあたしは見とれてしまっていた。

すぐに、すべてを思い出して嫌な気分になる。正直、この二人には会いたくなかった。二月のあの日から、ずっと、できるだけ思い出さないようにしていた。

「……何」

とげとげしさが声に出てしまう。

「えっと、その……ごめん。本当にごめん。何から謝ればよいかわからないけど、でもどうしてもこのままにしたくなくて」

「……」

「一行さんから話は聞いた。身勝手なことはわかってる。でもどうしても説明しておきたいことがあるんだ。三〇分だけ、時間をもらえないかな。……ヤタのためにも」

堅書君はずるい。卑怯だ。ヤタの名前を出せば、あたしが断れないって知ってて言うてる。

一行さんも頭を下げた。

「私もきちんとお詫びしたいと思っています。それと、お見せしたいものも。お願いします。お時間を頂けませんか」

「……わかった。三〇分だけね」

もう、会うのもこれが最後だろうし。あたしは二人の正面に向き直った。

がっしりした一枚板の長テーブルに作り付けのベンチ。詰めれば両側に五人ずつは座れそうな巨大なテーブルをあたしたち三人は贅沢にも占拠している。

本部構内のめばしいベンチはどこも卒業生とその家族で満席で、散々通った中央食堂も今日はちょっとね、ということ、結局そのまま構内を縦断して、やっとたどり着いたのは北門前に昔からある有名な喫茶店だ。ここに歩いてくるまでにすでに十五分くらい経過していて、残り十五分で解放してもらえとはとても思えない。あたしはもう半分諦めの境地でここに座っている。散々な卒業式だ。

意外にも、店内の混雑度は普段と変わらない。袴姿のあたしたちはちょっと目立つかな

と思ったけど、周囲の誰もまるで気になんてしてないみたいだ。いつもみたく年齢不詳の男性が分厚い英語の本を読んだり、留学生たちがタブレットを片手に静かに議論したりして、今日が卒業式だなんてことを忘れちゃいそうになる。

向かいに並んで座っている堅書君と一行さんは、互いに敬語でひそひそとメニューを相談し合っている。

「一行さん、ほら、学割メニューがあるみたいですよ」

「ありがとうございます。……では、私はこれを」

「僕も、カフェにしますね」

堅書君がタメ口で話すのはですます禁止令が出たうちのグループ内だけで、本来はですます調がデフォみたいなんだけど、一行さんともそうやって話してるなんて想像すらしてなかった。なんか、誰も邪魔できない完成された空間が、二人の間にできあがってるみたいに感じる。むしろタメ口で話すあたしのほうがアウェイ感を持ってしまう。たった一メートル先に並んだ二人が、とてつもなく遠く感じた。

「カフェ三つお願いします、学割で」

学生証を掲げたのはあたしと一行さんだけだったけど、店員さんは三人とも学割扱いにしてくれた。まあ、今日こんな恰好をしてる時点でどう見ても学生グループだし。

「えっと……ありがとう。僕の学生証、さつき教務に返却してしまったから」

「あ、てことは」

「ああ、おかげさまでアルタラセンターへの入所が決まった。まずはお礼を言いたい。本当
当にありがとう、感謝してる」

堅書君はそう言って頭を下げた。

「そっか、おめでとう」

さつきから、あたしの心は凪いでいた。なんかもう、怒りも悲しみも嬉しさも特に感じ
なかった。というか、何も考えないようにしていた。この話を忘れたかった。なのにこん
な話されると、思い出しちゃうじゃん。澱のように心の奥底に溜まっていた不機嫌が浮き
上がりかける。

「そのことで、ひとつ謝りたいことがある」

二人で無謀な実験して死ぬって話？ その話はいいいもう。勝手にしなよって言ったん
だから。

だけど、続く堅書君の言葉に、あたしは完全に混乱した。

「もしかしたら誤解を与えてしまったんじゃないかって。訂正させてほしい。——僕達
は片道切符の旅に出かけるつもりはない。もし行けるとしても、必ず戻ってくるつもり

だ」

え……？ 聞いてた話と違うんだけど。

「戻ってくる……？ 戻って来れないって、一行さん言ってたじゃん。じゃあ、あの話は何だったの」

「私からお詫びします。本当にごめんなさい。ですが、言い訳がましいのは承知ですが、騙すつもりは全くなかったのです。貴方にお話ししたあの時点では、私達もそう思っていました。帰還は不可能であると」

一行さんが弁明する。相変わらず無愛想なその口調には確かにどこか、申し訳なさそうな感触があった。

「しかしその後、堅書さんと検討を重ねた結果、離心率 e を1未満に抑えられる可能性がわずかながら出てきたのです」

いや、そんな後付け説明みたいなこと今さら言われても。

「そのきっかけとなったのが……貴方なんです。貴方は、私達を救ってくれました」
「へっ……………??？」

まるで行先が見えなかった話が急角度でこっちに突っ込んできて、気づいた瞬間には吹っ飛ばされていた。

「ああ、一行さんの言うとおりなんだ。君のおかげで、僕達の軌跡は楕円を描けるようになる。またここに戻って来れる」

「あのさあ……」

あたしは完全にあきれ返りながら、目の前のバカップルを見つめる。

ああもう。まったく、この二人は。いつだってそれだよね。いつもそうやって、自分たちだけ納得して、論理を全部すっ飛ばしてさ。

「……話飛びすぎなんだってば!!」

論理の飛躍には慣れてたつもりだったけど、今日のそれは特大の場外ホームラン級で、史上最高に話が見えなくなっていた。さっきまで心を満たしていた虚無すら、どこかに吹き飛んでしまった気がする。あの胸糞悪い心中話がほんとに誤解だったっていうなら、早く真相で置き換えてしまいたい。たとえそれがどんなホラ話だったかまわない。

「あたしが勘違いしてたって言うなら、ちゃんとわかるように説明してもらおうじゃないの」

運ばれてきたコーヒークップを一口啜ってから、あたしは拳でテーブルをどんと叩いて、

二人を睨み付けた。

10

タブレットの画面いっぱいには赤青のヒートマップが映し出されている。あたしは湯氣を立てるカップを手に、一行さんの説明に耳を傾けている。

「これが二年前、2032年6月時点でのアルタラの量子記録から抽出した堅書さんの量子精神データです」

「見やすいように二次元に縮退しているけど、実際には数千兆のパラメータからなるベクトルの集合体だ」

堅書君が補足する。一行さんは画面を操作して、似たような画像をもう一枚呼び出した。「そしてこちらが今月、2034年3月の量子精神データ。もちろん細かい違いはありますが、根幹は本来ほとんど変化しません。特にナラティブ宇宙論で重視される物語志向に関する成分は、二年間程度ではそう変わらないのが普通です。ですが、この二つのデータを調べるうちに、それまで注目していなかったパラメータで興味深い差異が見つかりまし

た」

「ふうん。それで？」わからないなりに相槌を打ち続ける。

「その差分成分と結びつきの強い周辺の量子記録を抽出して可視化を試みたのがこちらです。もちろん量子記録データの内部表現を直接取り出すことは不可能なので、拡散モデルによる推定です。画像生成AIと原理的には一緒です」

解像度の低い動画クリップが再生される。全体的にぼやけていて、細部はよくわからない。だけど、動画の中でうごめいている黒っぽい何かの特徴的な動きに、あたしは見覚えがあった。

「……………え、ヤタ!？」

それは確かにヤタの動きだった。しつぽをぴんと立ててすりすりしてくる姿、大きく伸びをしてごろんとお腹をみせる姿、一心不乱に猫ミルクを舐める姿、ストーブの前に陣取って丸くなってる姿。粗いピクセルの中にいるのはどう見てもヤタだ。子猫の時からずっと見てきたから、はつきりとわかる。

画面がズームアウトして、ヤタの隣に何か別の物体がフレームインしてくる。猫よりもっと大きな何か。アングルが変わって、それが人だと気づく。明るめのボブに白っぽい服。ヤタをなで回したり、タオルでくるんだり。また場面が変わる。何かを鍋から皿に

盛っている。パスタだ。二皿のうちのひとつをこちらに差し出してくる。靴箱の横にしゃがんで食べ始める。食べながらもこっちに何か話しかけてきたり、大笑いしたり。ミュートで再生しているから声は聞こえないけど、くるくると表情を変えながらこっちに向かって笑いかけてくる。

待って。今、あたし、何を見せられてるんだろ。

そこに映っているのは。

毎朝洗面台の鏡の向こうに散々見飽きた顔だった。

「なに、これ……。あたし……。？　あたしが映ってんの？」

堅書君が頷いた。

「え？　な、なんで？　いつの間に撮ってたのこれ」

「撮ってたわけじゃない。僕の量子精神データを元に生成した動画だ。僕の視点になっているのはそのためだ。その……なんかごめん」

「なっ……」

動画の中のあたしの服は次第に薄手から厚手に、ブラウスからカーディガンに、コートに変化していく。コンビニ袋からこっちに差し出される中身もアイスからおでんに変わる。ヤタもだんだん大人の猫のフォルムになっていく。時折知らない人や風景の映像も混じる。

ただど圧倒的にヤタとあたしの姿が多かった。何気ない日々の時間がそこには連なっていた。

決まり悪そうにしている堅書君の横でそれを無言で眺めている一行さんに気づいて、震え上がりそうになる。だけど一行さんは超然として説明を追加する。

「これらのシーンに共通して見られるパラメータは、現実を強く志向する成分でした。ナラティブ宇宙論が主に扱う、物語を志向するベクトルとは直交するものです。というより、このような軸があることに私は気づけていなかった。私も堅書さんも元来、量子精神のナラティブ志向性が平均より高いこともあり、それしか見えていなかったのです。ご参考までに、ナラティブ志向パラメータから生成されたシーンもお見せします」

別の動画が始まった。雑多な映像のコラージュみたいに見える。髪の毛の長い女性が頻繁に登場する。一行さんだ、とすぐに気づいた。高校の制服に始まり、本を読んでいる横顔や勉強する姿、浴衣に水着。あたしが見たことない笑顔をこちらに向けている。それに多いのが千古先生や大学の風景、講義資料や何かの計算結果、白いフードの男性の姿。SF映画のワンシーンのような映像もあった。

微妙にマウントを取られてるような気もしたけど、腑に落ちた気がした。見果てぬ夢を追いかけて浮世離れした生活を送る堅書君の原風景は、これだったんだ。

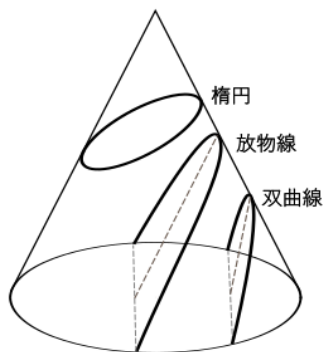
「私は気づいたのです。ナラティブ宇宙論において、ナラティブ志向ベクトルだけを考慮していてもそれは世界の正確な理解ではない、それと同じくらい、現実を志向するベクトルが重要な意味を持つ、と」

一行さんの話は止まらない。

「行きて帰りし物語という強力な物語類型があります。古今東西の物語に共通して見られるその構造は、必ず物語への旅立ちと現実への帰還がセットになっています。現実志向という次元を考えることで初めて、ナラティブ時空間における軌跡の本質は二次曲線ではなく円錐面である、とようやくわかったのです。これまでの私は、円錐の切断面だけを見ていました」

堅書君がノートを取り出して円錐の図をさらさらと描いた。

「円錐を平面で切るとする。その切り口は、切り方によって楕円にも放物線にも双曲線にもなるよね。今まで僕達が片道切符だと思い込んでいたのは、こんな風に、双曲線になるような切り方しか考えてなかったからだ。でも、切り方を変えれば楕円になる。eは1未満になる。つまり僕達は、行って帰ってくることができる」



ボールペンの先がぐるりと輪を描く。

「それに気づかせてくれたのは、君なんだ」

「あたしが……」

「いつだったか、猫を飼うってことの責任について、話してくれたことがあったね。勝手に倒れられたらヤタはどうなるんだって」

「え、うん」

「あの話がずっと心に引っかかってたんだ。だから、一行さんから離心率の話聞いたと

き、真つ先に思い浮かんだのはあの言葉だった」

そう語る堅書君の顔つきが、今までにないくらい穏やかなのにふと気づく。初めて会ったときからずっと、いつもどこか思い詰めたような横顔だけを見つめ続けてきたから、初めて見せられたその表情にどきりとする。

だけどそこから先の世界はあたしのものじゃない。一行さんのものだ。わかっている。だからあたしは、緩衝地帯までしか立ち入らない。そして今あたしが立っているここは、緩衝地帯の最突端だ。

「白状する。この世界に戻れないと言われたとき、それでも行きたいという気持ちは確かにあった。一行さんと一緒ならどんな世界にだって行ける、戻れなくてもかまわない、と。実現まであと一步のところまで来ていたから、エンジンアとしても引き下がりがりたくなかった。だけど、君の言葉を思い出して、自問した。ヤタはどうなるんだと。君はどう思うだろうかと。……君を裏切っているのかと」

話すときいつも目線を合わせてくれなかった堅書君の目が、切れ長の理知的な瞳が、今日だけはまっすぐにこちらを見ている。

「それに、先生を失ってあれほどショックだったのに、僕はあまりに周りが見えていなかった。君や学科のみんな、千古さん、実家の母——残された人達に僕と同じ苦しみを与

えることになる。『負の連鎖』だ。これも君の言葉だったな」

そういえば、そんなことを言ったような気がする。

「——だから、計算した。文献を読んだ。実験した。今までのデータも解析を全部やり直した。その過程であのパラメータが見つかった。過去の量子精神データでは量子ゆらぎに埋もれていたから、これまで気づけなかったんだ。ノイズフロアから立ち上がって有意信号として見えてくるようになったのは、君とヤタに出会ってからだ。僕の量子精神に何らかの不可逆な変化があったのだと思う」

「……」

「君もヤタも、現実にはちゃんと根を張って生きている。だから、とっくに知ってて、教えてくれたんだね。戻る現実があるからこそ、人は冒険の旅に出られるんだってことを」

黙ってずっと聞いていた一行さんも、ソーサーにコーヒーカップを置いて言う。

「貴方は、私に言うてくさいました。二人ともバカである。きつと不幸になると。……おっしゃるとおりです。堅書さんも私も大バカ者です。いつも、現実より夢物語のほうに目が向いてしまう。やってやろう、と決めたら周りの声も耳に入らなくなってしまふ。だから、地に足をつけて、いつでも現実に引き戻してくれる貴方という存在は、ナラティブ空間の向こうを目指す私達にとって最後の命綱なのです」仏頂面が消え、可憐な花のよ

うな柔らかな笑顔が広がった。「ありがとうございます」

あれ？ 何これ褒め殺し？ 何でいつの間にかあたしが二人を助けたみたいになつてんの？ うまく丸め込まれてる？

「……ふふ」

なんかもう意味不明すぎて、笑えてきちゃった。怒る気すら起きなかった。

「いやほんとバカだよ、二人ともさ」

あたし何もしてないし、ただ堅書君の幸せを願ってただけなのに、何でこんな感謝されてんだろ？

「あはは、マジで大バカだよ！ ベンキョしすぎて完全バカんなっちゃってるって」

だって、こんな誰が見たって主人公級の二人をさ、あたしみたいな完全モブ面づらのエキストラが助けるなんてさ。面白すぎるじゃん。

「正直、全然ついていけないけど、何かの役に立てたんなら良かったよ。だけどさ」

ひとしきり笑ったあと、釘を刺す。ほんと、この二人、ほっとくとアクセル踏みすぎるから、あたしが時々ブレーキかけてあげなきゃなんない。現実には引き戻す役っていう一行さんの見立ても、あながち間違っていないかもしれない。

「戻って来れるって言っても、理論上の話じゃん。それにどっちにしても一旦は脳死に

なってしまうんでしょ。そこからほんとに安全に蘇生できるの？ だいたい、円錐の切り口を変えて楕円も双曲線も選べるようになるって、ぱっと見、自由度が増えて余計大変になりそうなんだけど」

疑わしい点はまだまだ大量にあるけど、ひとまずここで止める。堅書君と一行さんは困ったように顔を見合わせてる。

「二人ともすっかり行ける気になってるかもだけど、絶対確実って言えないうちは、あたしが許さないから」

「……流石だな。問題はそこなんだ」

ほらやっぱり。甘いんだよね、詰めが。

「もちろん、やるからには安全確実な手法を確立せねばと思っている。量子精神の物理脳神経との再同調については、プロトコルはほぼ確立したといっている。ただ、その……量子精神データのナラティブ時空間での取り扱いについては、まだ知見が足りてない」

「はい、私の研究室でもナラティブ宇宙論はまだ手探り状態です。4月からも修士課程で研究を続けるつもりですが、円錐面の切断平面の任意性を絞り込むには、個人ごとの量子精神データをナラティブ時空間に適切にマッピングせねばなりません。数千兆ものパラメータをどうクラスタリングし、どの次元に射影すればよいのか——」

え、何？　そこで悩んでんの？

「ちよっと待った。そのデータってスパース？」

「え？」

話を遮ったあたしを。ぼかんと見つめる二人。

「まったくもう、講義も演習も内職ばっかしてたからだよ。だから言ったじゃん、ペンキヨしすぎるとバカになっちゃうって」

初めて、勝てた、って思った。

「——そのへん、あたしの卒論」

対象は全然違うけど、やってることはすごく似てる。点と点が線でつながる感覚。畑違いのトンデモ話が、解くべき問題として一気に自分の言葉に翻訳される。アルゴリズムをちよっと改良すれば行ける予感がある。ニーズがあるなら、やってやろうじゃん。

修士課程でほんとにやりたいことが、ようやく見つかった気がした。

喫茶店を出たあたしたちは、再び本部構内を時計台方面に歩いて行く。堅書君のお母さんが仕事を早く切り上げて、息子の晴れ姿を見に大学まで来てくれるんだって。ね、ほら、堅書君。お母さんのためにも絶対戻って来なきゃダメだよ。堅書君はさ、自分がどれだけたくさんの人から愛されてるのか、無自覚すぎるんだよ。口には出さずに、一行さんと会話に興じてる横顔をちらりと見る。でも、その幸せそうな表情を見ちゃうと、もう本気で怒る気にはならなかった。

工学部界限まで戻ってくると背後から呼びとめられて、その懐かしい声たちにあたしはちょっと泣きそうになった。

「おーい、堅書！……って、あれ？」

「え？　もしかして、もしかしくなくても、堅書君の彼女さん!?」

「きゃー、彼女さんだっ!」

「おおうっ。このお方が、か、堅書の……。うぐうっ……!」

振り向くと、演習のグループのみんなが勢揃いしてる。

「ども、初めましてっ!　堅書君にはいつもめっちゃお世話になりましたっ!」

「や、急にすいません。僕ら堅書君と同じ学科で、演習のグループが一緒で」

「……は、初めまして。一行、です」

ちよつとたじたじとしている一行さんに、堅書君はみんなのことを真っ赤になりながら紹介する。

「い、一行さん。こちら、前にも話しましたけど学科の同期で——」

あたしたちをぐるりと見回してから続ける。

「僕のことを何かと支えてくれた、その、大切な仲間……なんです」

照れながらもその顔は、何だかとても誇らしげに見えた。

「こら、堅書君さあ、ですます禁止って言ったでしょー！ 五百円ね！」

「いいんだよこの二人はよお！ 敬語で話すカップルからしか得られない栄養があんだよ！ ぐぬぬっ……」

ノリのいいこいつらを見てると、ほんとに変わらないな、きつと十年後もこんな感じなんだろうなと思う。

「ちよつとお、堅書夫妻と三人で今までどこにフケてたの！」

大正レトロな着物に身を包んだ小動物ちゃんが小声で話し掛けてくる。うちの学科では珍しい就職組だ。東京の会社だって聞いている。

「あー、ごめーん。ちよつと積もる話があつてさ」

「もう、みんな写真撮ろうつてずっと探してたんだよ！ 私も堅書君も今日でお別れだ

しね」

「写真！ いいじゃん！ 撮ろう撮ろう。どこで撮る？」

「んー、七号館の前とかどう？ やっぱ演習といえはこのイメージ強いし」

七号館の入口にみんなで陣取って、ふと見ると一行さんは少し離れたところに一人立っていて「撮りましょうか」と手を差し出した。

「自撮り棒あるから！ それより一行さんも一緒に撮ろ！ こっちこっち！」

「……学科の同期の記念写真なので、私が入るのは場違いなのは」

「何言ってるの！ うちら、一行さんの話のおかげでこんだけ結束できたんだからね！」

「はは、そりゃそうだな。ほら、一行さん、ここ！ 堅書の隣」

全員に手招きされて、一行さんは釈然としない表情で堅書君の隣、あたしの斜め前に並んだ。かすかに柑橘系の香りがした。

「もっと寄って寄って！」

ハデ子が前列の一行さんと堅書君の肩を両側からぐつと密着させる。二人の耳に同時に朱が差した。後ろのあたしからはバレバレだ。

「はい、チーズ！」

押しくらまんじゅう状態になって七人の体温を感じながら、みんなで謎のポーズで、集

合写真を撮った。その場でWizにアップしてもらって、さらにひとしきり盛り上がった。互いに少し別れを惜しんだあと、堅書君と一行さんはお母さんとの待ち合わせ場所の方向に去って行った。絵になる二人の背中を見送っていると、あたしの隣にいた眼鏡君も遠ざかる二人を見ながら、

「堅書、またちよつと変わったな。……いいほうに」
つてぽつりと言った。

「だね」

「三回生の頃は心配したけどさ。元に戻ったっていうか、むしろ昔より楽しそうになって、ほんと良かったよ」

「うん。あたしもそう思う」

「彼女とも仲良さそうで安心した」

「……ん、そだね」

眼鏡君は正面を向いたまま、少し黙ったあと、「……や、それにしてもさ、アルタラセンターなんてあいつほんとすごいよな。いろんな意味で」と言った。

「だよねー。マジでうちの学科一番の快拳だし、学部卒で入るって意味不明だし」

「やっぱさ、変人なところは変わんないな」

「うん。相変わず、めっちゃ頭おかしい」

「今に千古先生を超えそうだね」

「ふふ、もうとつくに超えてんじゃないかな。普通に」

やっぱり堅書君はどこまで行ってもとんでもない変人で、この先もずっとあたしたちは、それをネタにいくらでも盛り上がれるんだろうな。そんなことを思った。

12

マンシヨンのチャイムが鳴る。インターホンでロックを解除し、ドアを開ける。梅雨空をバックに、堅書君が大きな段ボール箱を抱えて立っている。

「悪い、遅くなった。明日の準備に思ったより時間かかって」

そう言いながら段ボール箱を床に置く。上面のフラップを開けると、まんまるな二つの瞳と目が合った。

「ヤター！」

持ち上げようとする堅書君より早く、箱からひょいと飛び出して、立てたしっぽを揺ら

しながら足元に寄ってくる。

「よーしよしよし、元気だったー？ んー、久しぶりだねえ」

かがんでわしゃわしゃする。ヤタは顔をあたしの手に押しつけてすりすりしてくる。

「はは、やっぱり、僕よりよほど懐いてるな。あ、これ、当面のフード」

「ありがと。わざわざ桂までごめんねー。雨、大変だったでしょ」

「いや、センターの車の後ろに積んで来たから」

「は？ 社用車でしょ!? こんなことに使っちゃって大丈夫なの？」

「わりとみんな勝手に使ってるかな。買い物とか、帰省とか」

「アルタラセンターゆるすぎ!」

卒業と同時に堅書君はあの安アパートを引き払って、今の家はセンターのすぐ横らしい。相変わらず職住接近でワーカホリックなところは変わってないけど、ちゃんとお給料もらうようになってからは少しはまともな生活になったみたいだ。そういえばヤタもちよつとだけ太ったかな？

段ボールの中にはお気に入りのタオルや深皿、おもちゃも入っている。猫用のケージにはどうしても入ってくれないのに、この段ボール箱は居心地がいいのかおとなしくしてくれるので、ヤタを外出させるときはいつもこれだった。

「で、明日から三ヶ月？」

「ああ。いつもわがままばかりで本当に申し訳ないけど、あらためて頼む。三ヶ月間だけ、ヤタを預かってほしい」

堅書君は深々と頭を下げた。

京斗大を卒業したあたしたちは、それぞれの道に進んだ。堅書君は晴れてアルタラセンターへ。あたしと一行さんはそのまま大学院の修士課程へ。堅書君は業務の傍ら、先生に会いに行くための手法の研究開発を着々と進めていった。アルタラを直接触れるようになって、やれることが格段に増えたらしい。一行さんのナラティブ物理学も、あたしが卒論で使った手法を取り入れることで、夢物語じゃなくなってきたって自負してる。未だに、一行さんの領分は完全には理解できてないけど。

堅書君のやろうとしてたことは、入所早々、センター長の千古先生にあっさりバレた。千古先生は怒るところかめっちゃ面白がつて質問攻めしてきたらしいけど、質問の内容はすごく手厳しくて、安全性評価がなっていないだの精度が数桁足りないだの、問題点を山のように指摘されたって。一度あたしもセンターに説明に行ったけど、千古先生はそれはもう楽しそうに、

「アイディアは抜群に面白いけど、それを形にするための経験値はまだまだ足りてないねえ。関係各所への申請とか対外的な公表の仕方とか、厄介事はこっちで巧いことやっとくからさ。こういう時こそ上司は利用し尽くすもんだよ」

とか、

「これは徐君^{シュー}たちには当面黙っておいたほうがよさそうだねえ。大丈夫、僕は守秘義務は守るし、君たちが危険な目に遭わないように全力を尽くすのがセンター長の役目だからね」

なんてニコニコしながら言ってる、やっぱこの先生頭ぶっこんでるなと思ったけど、助言の頼もしさは半端なかった。別の世界に行けるなんて半信半疑だったあたしも、千古先生の厳しい無茶振りに応えて研究結果が積み重ねられていくのを見ているうちに、少しずつ自信が持てるようになってきた。

何度もシミュレーションや実験を繰り返して。徹夜で議論して。納得するまで解析を繰り返して。時には壁にぶつかって。

気がついたら三年の月日が過ぎていた。そして明日、堅書君の計画がついに始動する。

玄関先にしゃがんでヤタをあやししながら、とりとめのない話をする。堅書君もしゃがん

でヤタを突つつく。いつもみたく、玄関の一メートル四方の空間だけがあたしたちの奇妙な緩衝地帯だ。せっかくだし上がってよ、コーヒーくらい淹れるからさ。そんな言葉を今日もあたしは絶対口に出さないし、堅書君もそれ以上踏み込もうとはしない。

「三ヶ月って言っても『あっち』にそんなだけ滞在できるわけじゃないんだよね？」

「うん。三ヶ月の内訳のほとんどは準備とリハーサル、戻ってきた後の回復期間に充てられる。前にも言ったかも知れど、あまり長居してしまうと量子精神と物理脳神経のずれが大きくなりすぎて、再同調できなくなる。だから主観的時間尺度で数時間が滞在の限界だろうな」

「たった数時間のために三ヶ月かー。ほんととバカだよね」

「三ヶ月どころじゃない。僕にとっては十年だ」

そう言う堅書君の視線はどこか遠くのほうに投げかけられている。

「十年。ヤバイねー」

「ヤバイな」

「ほんとに行けんのかな」

「行けるさ」

「自信满满じゃん」

「昔、体験したんだ。だからできるって信じている。自分の力じゃないけど」

「またまたあ。ヤバイね」

「ヤバイな」

ヤタはごろんと寝転がって、いつものようにお腹を見せてきた。首筋をそつとさすつてやる。

ずっと気になってた質問をぶつけてみる。

「あのさ、堅書君がそこまでして会いたい先生ってさ、どんな人なの？ 写真とかないの？」

「何も残っていない。写真の一枚もない。アルタラにも記録されていない」

「ふうん、そっか」

「だけど……最近急に思い出したんだ。君が助けてくれたのは僕達だけじゃなかった。僕の先生もまた、かつての君に助けられたんだ。いや、違うか。かつて……じゃないな。だから君だったのかな。そうか。なるほど」

相変わらず堅書君の話は論理がぶっ飛んでて、全然わけがわからない。このぶっ飛び具合があたしは好きなんだ、と思う。

「そうかそうか。じゃ、先生によりしく伝ええてよ。で、先生の写真撮ってきて」

「善処するよ」

「なにそれ！ やっぱ全然戻る気ないでしょ！」

「……猫を飼うってことは」

堅書君は指先でヤタのあごを搔いてやりながら続ける。目を細めて気持ちよさそうにするヤタ。

「そういうことにも責任を持つ、ってことだったよね。だから、僕は絶対に戻る」

言い終えると堅書君は決心したように立ち上がって、床に置いてあった黒いリュックを左肩にひっかけた。

「そ。やっとわかったなー？ 猫を飼うって、そういうことだかんね」

あたしもヤタを抱いて立ち上がる。ヤタは脚をだらんとさせて、されるがままになっている。

「ヤタを預かるのは、あくまで一時的なものだからね。ちゃんと引き取りに来なかったら絶対許さないから」

「ああ、わかってる」

「無事に戻ってきて、ヤタを引き取って、それでもって一行さんと、ちゃんとこの世界でさ」

ふと、思いを馳せる。もしかしたら、無数にある多元宇宙のどこかには、堅書君の隣にあたしがいた世界もあるんだろうか。

この世界は違う。ここは、堅書君と一行さんのための世界だ。彼らが幸せになるための世界だ。あたしはただのモブで、それ以上でもそれ以下でもない。

「幸せになつてみなよ、バーカ」

悪態をつきつつ、目一杯笑つて、あたしは堅書君を送り出す。

「ああ、やつてやるさ」

堅書君も負けじと不敵な笑みを浮かべて、玄関のドアを開けた。雨脚はかなり強くなっていた。「じゃ、また」吹き込む雨粒をよけながらマンションの廊下の奥に消えていく堅書君を見送る。ゆっくりと音を立ててドアが閉まり、玄関にはあたしとヤタと段ボールだけが残された。

ヤタの温もりを腕の中に抱きかかえたまま、あたしはゆっくりと緩衝地帯にしゃがみこんだ。

「バーカ……」

首を伸ばしたヤタが、あたしのほつぺたをペロペロと舐めた。ヤタの小さな舌はざらざ

らしてて、ちょっとだけ痛かった。

13

研究棟の屋上に出ると頭上に七月のまぶしい晴天が広がって、寝不足の目を思わず細める。梅雨明けしたばかりの今朝の空気は、この季節の京都とは思えないほど湿度が低くて、大文字山に連なる比叡山や音羽山もはつきりと見える。ここからは京都市街が一望できる。

土曜日だというのに、屋上にはすでに十数人の学生や教職員が陣取って、三脚にスマホをセッしたり、SNSで最新情報を漁ったりしている。何かのイベントで数十年ぶりに自衛隊の飛行機が滋賀県上空を展示飛行するんだそうで、桂キャンパス近辺で一番高いこの建物に物好きな人達が集まってきたのだった。と言ってもここから滋賀までは距離があるし、ほんとに見えるかどうか怪しい。見通し距離の計算上は見えるんだとか、近くの山から大津プリンスホテルの先端が見えたとか主張してるやつらもいて、あーはいはいとか思いながらも、結構あたしは楽しんでたりする。

2037年7月4日、午前10時過ぎ。計画通りなら今頃、アルタラセンター管轄下のク

ラス3区域内で最終シーケンスが走り始めている。センター長の千古先生によって巧妙に人払いされていて、あたしも現場に近づくことはできない。そもそも堅書君と一行さんがいるのはセンター内なのか、というより京都市内なのかすらわからない。まあ、物理的な場所なんてどうだっていい。彼らの量子精神データはもうあと数分以内には、別の宇宙に向けてナラティブ時空間を遷移し始める。今日の二人は文字通り、物語の主人公だ。ん、違うか。最初からずっと主人公だったのかもしれないって思った。きつとこの宇宙が生まれる前から。あのバカップルめ。

あたしがやれることは全部やった。だから今は無事を祈るだけだ。

ふと周囲を見回すと、隣の研究室の眼鏡君も上がってきていて、右腕を前に伸ばして握りこぶしで仰角を測ったりしてる。

「やつほ。土曜なのに物好きだねー」

「お互いな。ていうか、土日いつもいるよね」

「そっちこそ！」

百人近くいた学科の同期のうち、未だに大学に残ってるのは数えるほどで、彼はそんな数少ない腐れ縁の一人だった。コンサルや金融、IT企業や大手電機メーカーの内定をゲットし、王道人生に向けて歩みを進める仲間たちを尻目に、博士後期課程という酔狂な道を

選んだあたしたちは変人の仲間入りをしたのかもしれない。

だけどやっぱり堅書君に比べたら普通すぎる人生だと思った。二回生から千古研に出入りして、学部卒でサクッとアルタラセンターに入っちゃって、彼女さんを連れて先生に会いに、物語の大海原を渡ろうとしている堅書君は、とんでもなく頭おかしい。その計画の一部に加担した立場としても、その思いはぬぐえなかった。

「そろそろじゃないかな。僕の時計だとあと二分強」

「どの辺かな」

「滋賀だから……比叡山のほう？」

眼鏡君はしきりにスマホのコンパスと山並みを見比べている。

「アバウトすぎ！ 琵琶湖って見えるんかなあ」

「湖面は無理だろ。でも琵琶湖の花火はギリ見えたらしい」

「え、花火見えんの！ めっちゃ見てみたいんだけど！」

「宇治川花火大会でよければ、今夜だよ。……どうせ夜まで研究室なら、また上がつてきなよ」

「今日!? マジで? え、ヤバ、なんでそんなの把握してんの！」

「……するだろ、普通。京都の若者として」

「なんで!? しないって!」

急に、屋上の手すりの前に陣取ってた人達がざわめき出した。北東の空を指差しながら声を上げている。

「え、来た? 来たの!? どこどこ?」

「どこだろ、見えない」

みんなが見ている方向を見てみたけど、それらしいものは何も見えない。

「あ……、あれかな。もしかして」

「え! どれ! わかんないんだけど!」

「ほら、鉄塔の左から三番目……あ、四番目。結構速い」

よくよく目をこらすと、ゴマ粒みたいな点の集合体が山の端ギリギリのところを北から南に向けて移動している。

「ちっさ!! めっちゃちっさ! 点じゃん、点!」

「あー、さすがに遠かったかあ」

「もっとゴオオオってやつ想像してたのにー! パイロットの顔が見えるくらいの。詐欺じゃん!」

「ああいうのは近くから望遠で撮ってんだよ。こんな何十キロも離れてない。……あー、

くそ、山に隠れた」

予想以上にしょぼい飛行にがつかりして研究室に戻ろうとすると、さつきより大きな歓声が上がったのが聞こえた。

「え？ ……あ！」

一旦は山に隠された機体たちが、右側から再び現れた。さつきより少し近い。尾を曳くスモークがゆるやかな弧を描き始めた。

「やった！ こっち来た！」

「仰角高いな！ もしかして山科あたりまで来てるか!？」

突然、六機の姿勢がいつせいに傾き、花が咲くように大きく散開した。

「うわっ……!？」

「え!？」

それぞれの機体は時間差でキラリと光りながら大きく旋回し始め、抜けるような青空に純白の円弧を鮮やかに刻んでいく。やがて大文字山の上空あたりに、六個の巨大な楕円が描き出された。一つの輪の周りに五つの輪が重なって、まるで五弁の花びらみたいだ。

「エグいねー……」

「ああ……」

あたしたちはバカみたいに口をぽかんと開けて、天空に現れた円の重なりをただ見上げる。

「サンライズか……？ や、サクラかな」

「あ、もう行っちゃう」

気がつくとも機体は再び一箇所に集まり、北に向かって小さくなってゆく。次第にスモークの白い航跡が薄くなり、ゆっくりと青空に溶け始める。

「……消えちゃった」

数分後にはただ青空だけが広がっていて、さっきまでそこに六つの大きな輪っかが浮かんでいたなんて、まるで信じられなかった。夢だったような気すらしてしまう。

「やべ、写真撮るの忘れた」

「あ、あたしもじゃん！ ちょっと、なんで撮ってないの！ 当てにしたのに！」

「人を当てにすんなよ！」

完全に忘れてた。だけど、まあいつかって気がした。写真や記録に一切残らない思い出があったっていいじゃん。記録に残らないからこそ、自分の目しか信じられないからこそ、もう一度見たいと思える。会いたいと思える。

堅書君、もう先生に会えたかな。全然違う時間軸だから「もう」ってのも変なんだけど、

きつと会えただろうなって思った。彼らの軌跡は楕円を描いて、別の楕円と重なり合いながらも、絶対ここに戻ってくる。ヤタとあたしが待つてゐるこの世界に。なぜか、あの飛行機雲を見た瞬間、そんな確信があつた。

屋上に集まつた人達もばらばらと散り始めている。いつもの土曜日の研究棟の風景が戻つてきつつある。ああ、そうだ。月曜の午前三時までに国際会議用の予稿を投稿しなきゃいけないんだつた。ずーんと心が重くなる。非日常は一瞬で終わった。厳しい現実つてやつに戻るしかない。

「じゃ、僕、先戻るから」

「あ、うん」

歩き出しかけた眼鏡君は、急に止まつてこちらを振り向くと、

「花火。一応、今日の19..45だから」

とだけぼそつと言つて、また歩き出した。背中越しに声をかける。

「ふーん。今日も研究室泊まんの？」

眼鏡君は歩きながら、こちらを振り返らずに答える。

「悪かったな。どうせ泊まりだよ。デバッグ終わんないし」

「あつそ、あたしも予稿の締切まであと四十時間」

「……死ぬなよ」

「そっちこそ」

あたしは一呼吸置いて、遠ざかる背中に向かって声を張り上げた。

「今度こそ写真係、任せたから！」

「や、だから当てにするなつて！……ま、そうだな、一応、超望遠持つて来るよ」

眼鏡君はこつちを振り返つてそう言うのと、片手を軽く上げて階段を降りていった。

今夜もう一度だけ、この灰色の研究棟に鮮やかな非日常を咲かせてもいいかな。いいよね。ちゃんと現実に戻つて来るからさ。非日常があるからこそ、日常を生きていけるから。あたしだってそのくらいの権利はあるはず。夜まではまだ時間がある。夕方にでも一旦帰つてヤタにごはんあげて、コンビニで何かつまめるものでも買ってこうかな？ポテトフライとかチーズとかさ。お酒は……んー、今回はノンアルにしようか。二人ともさつさと現実に戻らないとマジでヤバイからね。一時間経ったらスパッと戻る現実逃避。システム権限で三ヶ月もほつつき歩いてるどつかの変人バカップルはマジ見習えつての。

気がつくとも屋上に残ってるのはもうあたし一人だ。ついさっきまでからりとしていた空気がいつしか京都特有のじつとりとした湿り気を帯びて、辺り一帯は早くもサウナみたいだ。いつもの京都の夏が始まろうとしている。祇園囃子と五山送り火に彩られる季節が今

年もやってくる。

ただどあたしにとつては違う。真っ黒でつやつつやの導きの神様が三ヶ月限定でついてくれている今年の夏は、ちよつとした冒険だつて怖くない。この新しい世界でも、あたしはもう迷わない。そんな一度きりの特別な夏が始まる予感に、浮かれすぎんなよ、あと四十時間、と自分で自分を戒めながら、あたしも研究室に向かつて階段を降り始めた。

(了)